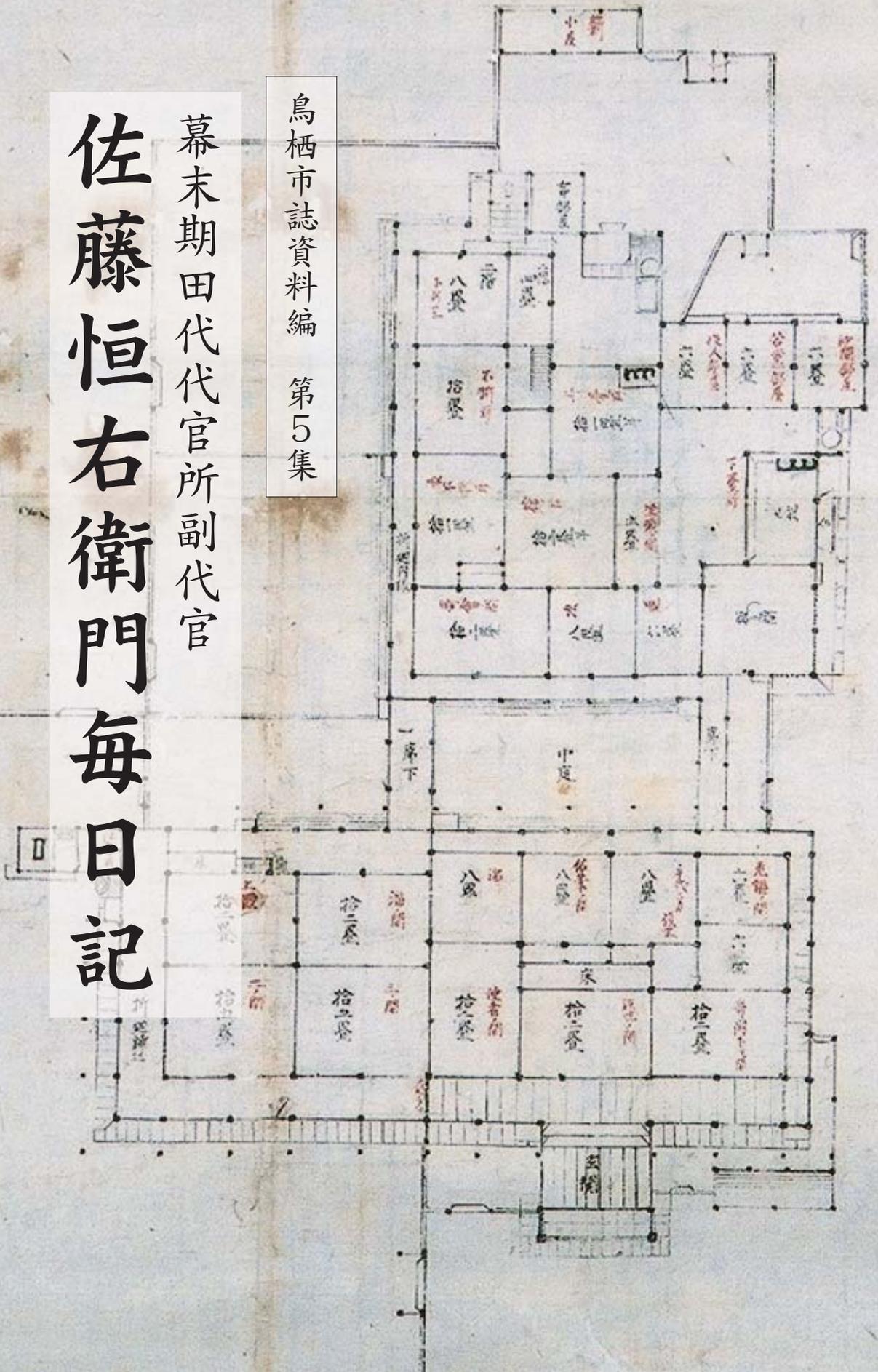


鳥栖市誌資料編 第5集

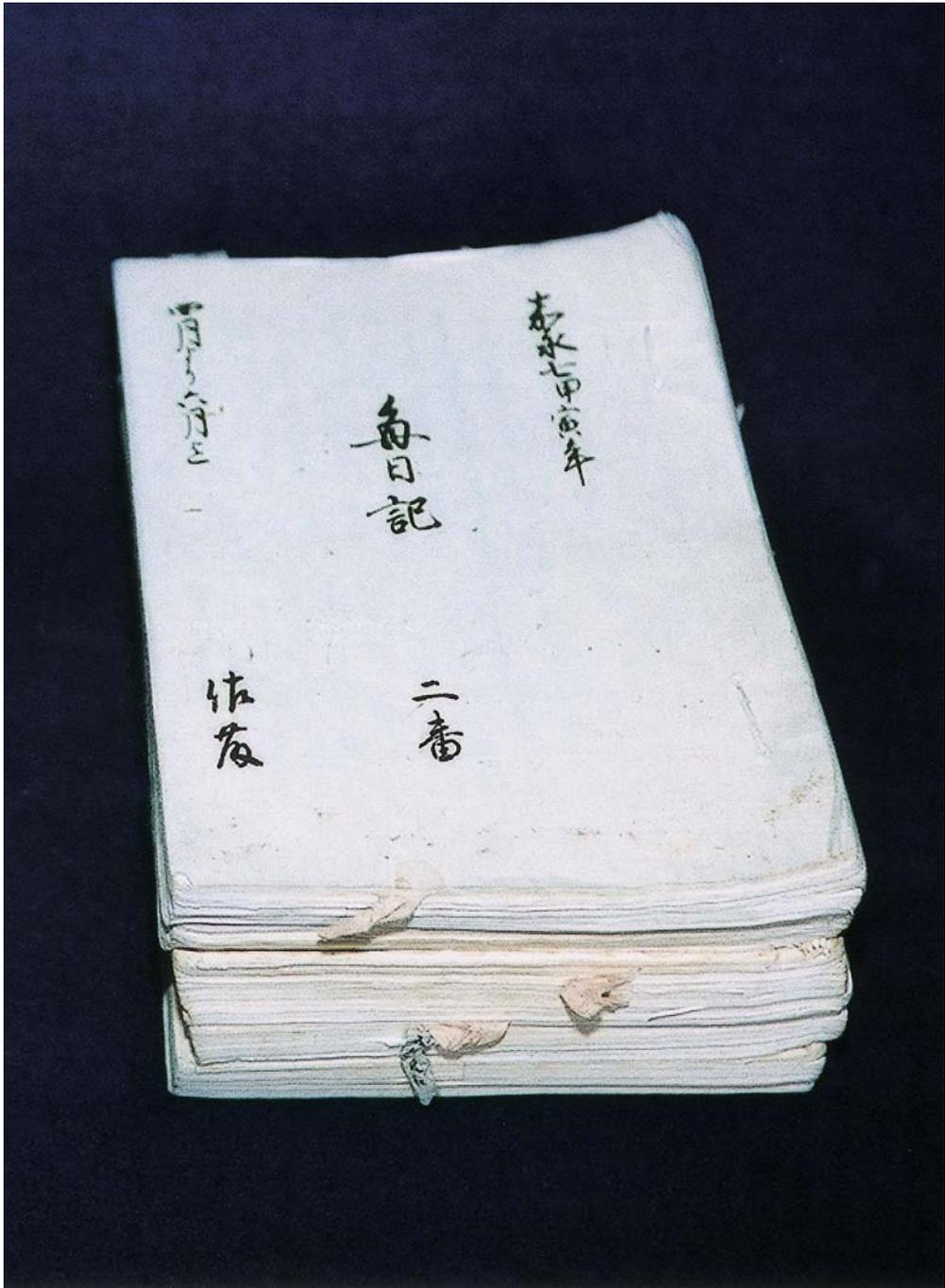
幕末期田代代官所副代官

佐藤恒右衛門每日記

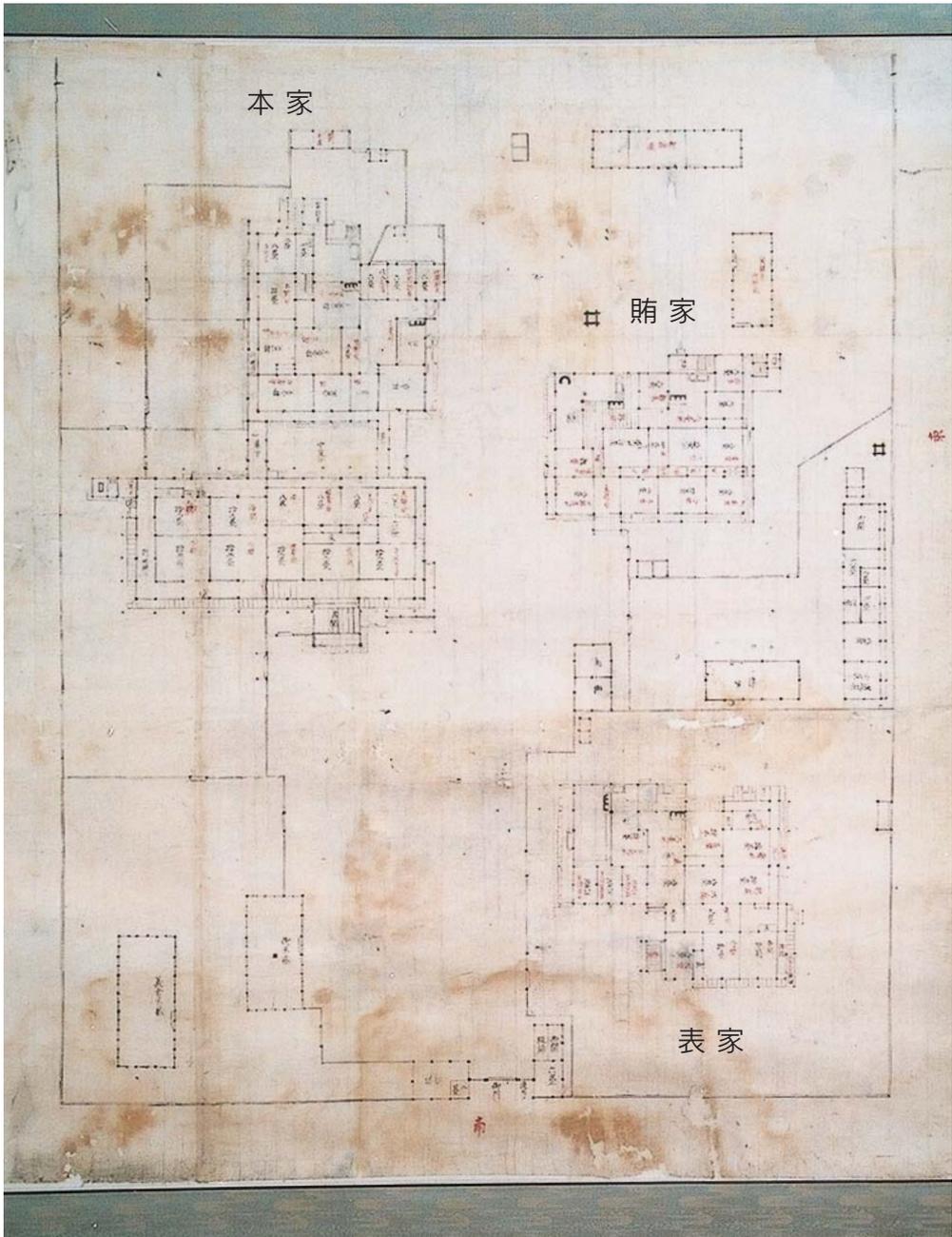


鳥栖市誌資料編 第5集

佐藤恒右衛門每日記



佐藤恒右衛門毎日記



田代官所指図（嘉永4年竣功）

序 文

昭和48年に刊行されました『鳥栖市史』は、合併した5町村をまとめた市史の必要性から、編纂・刊行されました。当時は、学術的にも優れた内容で反響を呼び広く活用され、市内外を問わず高い評価を受けました。また本編と資料編・研究編各4冊の構成は他の市町村史編纂の規範として参考とされてきました。しかし、刊行後30年近くを経過し、社会状況の著しい変化、新しい歴史資料の発見、交通・交流都市としての発展など、新たに記録すべき事項が多分に蓄積されたため、改訂の要望が起きてまいりました。

また、「生涯学習」の時代を迎え、市民からも自分たちの住む地域をより深く理解しようとする気運が生じつつあり、新しい市誌の編纂・刊行は、市民文化の向上に資するだけでなく、市民が新しいまちづくりに主体的にかかわっていくためにも誠に有意義であると考えます。

これを受けまして、平成16年の市制施行50周年を記念し、「多様な生活と文化」「人・物・技術の交流と広がり」をテーマとした新しい『鳥栖市誌』を編纂することとし、平成13年から鋭意作業を進めております。

このたび資料編として『佐藤恒右衛門毎日記』を刊行いたします。これは資料編の刊行を快く許可していただいた対馬・禮泉院、ならびに関係いただいた諸先生方のご尽力、市民の皆様の熱意の賜物でございます。

これからも市誌本編・資料編・研究編の刊行に向けて、作業を進めてまいります。『鳥栖市誌』刊行の充実のため皆様のご意見・ご要望また資料の提供などのご支援・ご協力を心よりお願いいたします。

平成15年3月

鳥栖市長 牟田 秀 敏

資料編刊行にあたって

平成13年より開始いたしました『鳥栖市誌』編纂事業は「多様な生活と文化」「人・物・技術の交流と広がり」をテーマとして作業を進めています。市誌本編はもとより、地域に重要な資料・研究を掲載した資料編・研究編の充実も編纂の重要な方針としています。幸いにも先の『鳥栖市史』の研究編・資料編各4冊は、大変優れたものであり、これを引き継ぐかたちで『鳥栖市誌資料編第5集 佐藤恒右衛門毎日記』を刊行することいたしました。

『佐藤恒右衛門毎日記』は幕末の田代代官所副代官の日記で当時の代官所や田代領の様子がことごとまかに記録されています。

本書の刊行にあたりましては、資料の公開を許可していただいた対馬・醴泉院をはじめ、松田杉枝氏（鳥栖郷土研究会）、長忠生氏（鳥栖市誌執筆委員）等、関係各位のご協力・ご尽力にお礼申し上げます。

今後も市誌本編はもちろん資料編・研究編の充実をはかりたいと考えておりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成15年3月

鳥栖市誌編纂委員長 米倉利昭

凡例

- (一) 原文に読点（、）および並列点（・）を加えた。
- (二) 振仮名のうち、平仮名は校訂者が一般読者の利便のためにつけたもので、片仮名の分は原本どおりである。
- (三) レイアウトは、できるだけ原本に近い体裁としたかったが、敬意を表する改行は、原本どおりとはせず、一般的な一字分を空にして前に続けた。
- (四) 送り仮名・仮名遣いは原本どおりとした。
- (五) 用字については次のとおりにした。
 - ① 漢字は基本的には原本どおりとしたが、常用漢字にあるものは新字体を用いた。
 - ② ただし、人名・地名・寺社名については原本に記載してある箇所は字体どおりとした。したがって、正字・旧字体とその他の字体を混用する例がある。
 - ③ 瓜生野町の「瓜」は、田代領近世文書の多くには、専ら「爪」と記載されているが、本書原本にもみえる「爪」は「瓜」と正して用いた。
 - ④ 原本にある異体・異字・略体・近世文書常用・一般通用などの文字で原本どおりの文字を用いたのは左のとおりで、他は正字体に直した。

俣	洩	禄	祗	餅	斗	曾	嶋	富	厩	椽	巾	<small>(巾の略字の類)</small>	ふ	<small>(より)</small>	ひ	<small>(して)</small>	ひ	<small>(異)</small>
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-------------------------	---	---------------------	---	---------------------	---	--------------------
 - ⑤ 変体仮名は平仮名に直したが、真仮名・平仮名・片仮名については原本どおりとした。
 - ⑥ 原本記載の「候」を示す「々」・「々」は、すべて「候」に統一し、畳字「々」は「々」とした。
 - ⑦ 原本に誤用されている文字には、原則として初出のみに傍注を施した。なお、近世文書に多くみられる「儀」・「議」を意味する「義」も原本どおりとし、傍注は逐一施さなかった。
- (六) 原本からの解説は松田杉枝（鳥栖郷土研究会）が行い、校訂・解題・校訂者注については長忠生（鳥栖市誌執筆委員）が担当した。

解題

対馬藩勘定奉行の経歴をもつ佐藤恒右衛門（禄高七十石、馬廻）が飛地田代領の副代官（表役）として着任したのは嘉永七年（一八五四）二月二十四日。以後八ヶ年、代官（奥役）平田大江（禄高三百六十石、のち十石加増）の補佐役を誠実に勤め上げ、文久二年（一八六二）四月六日、後任と交代して対馬へ帰国したのは同月二十四日である。健康にすぐれなかった恒右衛門は、さらなる就役を辞退していたが聴き入れられず、晩年に至るまで大勘定席に在った。

しかし、この間には政変による痛恨事にも遭った。元治元年（一八六四）、勝井騒動の渦中にまきこまれ、嫡子東一郎の流罪、そして牢死、恒右衛門自身も減禄・蟄居という憂き目を見たのである。しかも、父子とも「田代における不心得」を「罪科」とされたから誠実に田代役、もしくは臨時出役を勤め上げた父子の心中はいかばかりであったろうか。幸い嫡孫薫太が承祖を許されて家名は存続することを得、恒右衛門も勝井政権崩壊後に復禄・復役となった。明治二年（一八六九）十一月二十九日没。享年六十四歳。

恒右衛門は田代在勤中から日記をつけ、帰国後も続けている。その「毎日記」は佐藤家代々の菩提寺である対馬厳原町天道茂の天台宗醴泉院が預かっていたが、昭和四十年代に本土のある研究機関に貸出中、ある騒動のためその一部が不明になったという。現在残っているのは田代在勤中前半の縦帳八冊、別冊の半横帳二冊、後半期の半横帳八冊と帰国後の半横帳四冊である。今回の刊行で収載したのは前半期の縦帳八冊（二・九・十一番欠除）分である。

恒右衛門は勘定畑出身だけに、きわめて筆まめに記している。その内容は職務そのものか、その延長・関連のものが大部分を占め、私的生活にかかわるものは、ごくわずかである。身分・格式・先例を重んずる記載が随所にみえるのは、ご時世といえようか。

今回の刊行では、幕末期の激動がうかがえる後半期以降の分を収載できなかったことは遺憾であるが、それでも幕末期の田代領の情勢を知る上で史料価値が高いものであることを確信するものである。

目次

凡例

解題

1	毎日記二番	嘉永七甲寅年	四月より六月迄	一
2	毎日記三番	嘉永七甲寅年	七月朔日より八月晦日迄	三七
3	毎日記四番	嘉永七甲寅年	九月 <small>十一月二十七日安政を改元</small> より十二月迄	七九
4	毎日記五番	安政二乙卯年	正月より六月迄	一二九
5	毎日記六番	安政二乙卯年	七月より十二月迄	一九七
6	毎日記七番	安政三丙辰年	正月より六月迄	二八七
7	毎日記八番	安政三丙辰年	從七月至十二月	三四七
8	毎日記拾番	安政四丁巳年	四月より閏五月迄	三九五
9	毎日記十二番	安政四丁巳年	九月より十一月十日迄	四二三

校訂者注

付 函

嘉永七甲寅年

每日記

二番

四月より六月迄

佐藤

- ♪ 地役中宗門改 四月十五日
- ♪ 御勘定御普請役止宿 四月十七日
- ♪ 御目付御泊り 六月十三日
- ♪ 交代御寄合五島兵部様御泊り 六月廿七日
- ♪ 御領中出水所之破損 六月廿八日
- ♪ 土用入 六月廿六日
- ♪ 兆徳院様御十三回御忌 五月廿九日
- ♪ 残判改 四月廿四日
- ♪ 順気御祈禱 六月廿二日
- ♪ 交代御寄合五島兵部様御泊 六月廿七日
- ♪ 御勘定奉行鳥井儀右衛門着 四月十日

- ♪ 禁裏炎上御斎 五月十日
- ♪ 御勘定奉行嶋井儀左衛門着 五月四日、出立同十三日
- ♪ 岩谷延之允役儀断願 五月三日
- ♪ 大石渕之介同多兵衛御徒士格受礼 五月朔日
- ♪ 酒井村幸兵衛娘六歳ニ相成溺死 同十日
- ♪ 義倉米蔵詰 四月十二日
- ♪ 今町治平次男溺死 六月廿五日
- ♪ 重田池へ旅人溺死 六月廿六日
- ♪ 大川こぶ芻出来場所見分 六月廿四日

四月四日 晴天

今未之中刻、（前條題）兩郡より帰郷、委細別冊二記

手代役村山東一郎・緒方仙八、去ル朔日令帰郷居、御用向之廉々

御国御年寄中（前條）より仰下候御状、奥役（代官）を為持来

拙者義、御勘定奉行之儀者被差免、席之義ハ爰元在勤中是迄之通

被成下候段、先月廿二日於御国被仰出候段、与頭多田外衛（こどもと）被

達越候書状相達居、今日帰郷之上致拜見

右之段、奥役（丁校訂者注）・賄役江吹聴として罷越、手代中江も及吹聴

四月五日 晴天

村山東一郎・緒方仙八入来、於御国御用向被仰付之次第申出、差

掛兩郡米五千俵御任被成候付、壹万俵調米出来候丈早々送越候様

との御事之処、第一金調先立候事故、日田御用達廣瀬久兵衛父子

江銀談可致外無之旨申出、此義拙者帰郷前、内決之儀共相考候付、

奥役・江口江も申出存寄無之候ハ、明日兩人共日田江出立之運、

可被心得旨及返答

太田観音開帳ニ付、日数十日芝居差免有之、今日家内初（て）而見物ニ

遣ス

四月六日 晴天

山城卯兵衛、博多（前條）引返し当所へ罷越、内山江泊ル

明七日御勘定御普請役当駅泊り之先触相達候段、町役（由代官）を相届

今晚、奥家内入来有之

同七日 雨天

山城卯兵衛今朝致出立暇乞ニ来ル、同人を路金差支候付借用之儀

申聞、折柄古森泰庵（對馬中官、醫者）を送り来候広東参代（広東大参）送返し、同人江事託遣ス

長崎江下向之御勘定御普請役、今暮比当所着有之、拙者義麻上下

着、旅宿江相勤

但、御使者ハ麻上下、宿見廻ハ肩衣着之先格也、今日ハ御使者勤有之

候付、其候にて宿見廻ニ罷越

御勘定

胡桃子松実一箱
金子三百疋

附目錄のし包添

藤沢順三郎殿
旅宿長崎屋

右 上より御音物之御品釣台ニ載、宰領御門番相附、御使者行列

之先江為持罷越、御品ハ宰領を取次へ夫々引渡、拙者義出駕、雨

草（應）りニ踏替、玄関にて刀ハ若党へ相渡罷上候処、取次之人出云、

御使者御口上 對馬守申入候、此度長崎御下向御道中無御障御通

行珍重存候、為御見廻以使者目錄之通令進入候との御口上申述、

名札相渡候処、奥へ入、頼（やがて）而罷出、可懸御目候間御通被下候様ニ

との事ニ付、本座江罷通対座ニ居着（脇差）候処、暖氣之時節御安泰被

成御勤珍重存候、当所通行ニ付而ハ御丁寧御取扱被下置、殊更拜

領物をも被仰付難有次第奉存候、御礼之儀御役人中江宜くと挨拶

有之候付、国元へ可申越旨申述、且当御領中高被相尋、其外北

京・長崎異船等之内話有之、節々致応答、頓而罷帰候節、次之間
鋪居際迄被送出、取次之人ハ其玄関迄被送

金貳百疋

附目錄のし包添

御普請役

石川 太助
旅宿西野屋

右被遣之御品、前以宿亭主を以爲差出置、拙者義宿見廻として相
越、刀ハ玄関にて若党へ渡し置、玄関上り候処、取次之人罷越候
付口上、遠路無御障御通行珍重存候、当所御止宿二付、爲御見廻
遂参候旨申述、名札御名内佐藤恒右衛門相渡候処、可懸御目候間直ニ
罷通候様申聞候付本座江罷通、被遣物之挨拶有之、茶・烟草たばこ盆出、
蝦夷・浦賀・長崎異船之内話有之、節々致答、頓而罷帰候付、次
之間玄関之間敷居際迄被送出

、右二付、供廻左之通

一 先供貳人

郷 但、町之者郷ハ雇差出

一 若党四人内

忝人 玄関番
貳人 手人
忝人 郷 但、町之者郷ハ雇差出

一 駕籠之者六人

郷

一 草り取忝人

手人

一 立傘持忝人

郷

一 鍵持 忝人

小人

一 挟箱持忝人

郷

一 合羽籠持忝人

郷

一 挑灯持六人 郷

、貳拾三人

内三人 手人
内貳人 玄関番小人
同三人 町ハ雇郷ハ差出候者
同九人 郷夫
同六人 郷夫挑灯持

外ニ御言物宰領御門番一人
同持夫貳人 郷

、帰宅之上、玄関番江茶之間にて飯振廻、汁皿・漬物・中酒差出、
先供兩人、郷ハ罷出候若党一人・小人一人、、四人江上台所にて
飯振廻、豆腐汁・漬物・中酒之先例也

、怡土郡六十人格釘本久平・檜崎多七郎爰元へ罷出、先年両郡山潮

荒二付、銀札えんさつ主向を以地開相成居候処、加布里村東屋政右衛門取

引之内、右之地方札封之俣借入有之、今程不融通之札物正金ニ引

換返済令難洪候由ニ而銀札高年分一割宛焼捨相成居候を、当年ハ

焼捨高減数被仰付被下候ハ、仕繰を以致返済□□□□内願書差出候

得共、札焼捨之儀ハ一旦議定之旨も有之難及沙汰旨及評義願書差

返、東屋差引方之義ハいつれ共折合を付候様、手代中を以申付

、今昼、江口入来有之

、両郡江罷越候節之諸差引、玄関番古賀八郎ハ勘定可相立之処、若
輩にて届兼候付、青木小藤太受払取調持参也

四月八日 晴天

、御用日二付、会席江罷出

濱崎紙漉之主向并御役場銀札遣出之義被廢、書手・下代・使番ハ先ツ是迄之通被召置候との義、御国ハ御差図之趣、濱崎詰御勘定調役内山与次右衛門江達越之書面取調方書札方被申談候様、手代中江相達

、両郡江御收納取立として去冬ハ当春迄出役いたし候手代役岩谷三左衛門・門司金十郎・緒方幸之進義、目付役をも相兼令苦勞候処、於上ハ目付役之充行浮出にも相成候付、彼地諸運上銀之内ハ濱崎逗留之日数ニ応し被成下之義相達、委細日帳ニ有之、爰ニ略

但、目付役之勤場所を手代役ハ相兼候而、下一人之充行を致所務候訳、如何敷次第ニ存候事

、両郡江櫛仕立候ハ、上下之利益ニ可相成候間、仕立場所等取調相達度候間、心懸被申出候様、奥役・江口・内山評義之上、小藤太・金十郎・幸之進へ差含

四月九日 陰天

、啓祐院様 御日柄ニ付、肩衣着、昌元寺江奥役同然御寺詣仕

但、若党一人・草り取召連、裏御門ハ罷越、昌元寺裏門より不斷所中門を入、本座庭ハ上り、奥役本座北側、拙者南ハ北向江居着、夫ハ御仏殿江罷出拜礼、畢而二元之席へ居着、茶・烟草盆・茶菓子出ル

、住持本座之次迄迎送いたし候事
、長崎より飛脚として足輕甚ハ着いたし候段届ル
、長崎御奉行所ハ如例年、浦御触御状御渡ニ相成候付、御国御年寄

中江之書状筒送り来、急幸使差送り方申来

、松浦郡横田上村江滞在之尼惠豊と申者、異国之事ニ付、神靈有之旨、長崎ニをゐて御役筋江書面差出候趣承り候段、永留藤左衛門ハ奥役連名之内状相達候付、濱崎出役岩谷三左衛門江申遣、内分穩カニ取札方小藤太江差含

、肥前町人井手善兵衛ハ御借銀ニ付、米四百俵引当切符一枚御預印致押印、留役江相渡

但、此御借銀ハ御国ハ御差図調米壹万俵之内之由、使番平助義、御調米宰領申付、御国へ差越候付、届申出

、瓜生野良平と申者、所々令盜、於濱崎召捕居候付、繩下にして爰元へ呼取候付、御門番下横目卯八并瓜生野より繩引之者一人差出、濱崎ハ使番内忝人差加、爰元江送越候様申渡

、内山与次右衛門江左之条々達越

一 濱崎詰御勘定手代被廢候段、昨丑年被仰越候処、御收納取立方等之義、以前之振合を以、爰元役々而已出郡取斗候様、御差図有之候事

一 紙漉方御主向郡中難儀之訳合も有之哉ニ相聞候付、此せつ全被廢、御役場当用不足銀補方之儀、先於爰元如何様共主向を付候様との事

一 御役場札物之義被相止、尤引揚方胴金手当之儀ハ昨丑年紙代受込銀を土台にしていつれ之道急速引揚候様との事
一 濱崎詰書手・下代・使番引弘候而ハ彼是不使用之品有之候付、

先ツ是迄之通被召置候との事

一 御役場御算用之儀、当寅年ハ爰元より差立候様、与次右衛門義ハ御算用早々取片付致帰国候様、可相達との事御差図有之、就而ハ諸帳面其外受取渡之手数相立可申候間、爰元役々出張之比合可被申越事

一 紙漉方被廢候付、手先之者共差免方如何相達可然候哉、可被申越候事

一 紙漉御主向被廢、当寅年ハ御算用爰元ハ差立候様被仰付候付而ハ当用銀受払可致義勿論ニ候得共、いまた請取渡も不相濟事故、右手数相立候迄ハ是迄之通被相心得、御用支ニ不相成様、当用銀受払可有之候事

ハ下女ふさ心得不宜ものニ付暇遣し、世話人柳屋茂兵衛方江差返

但、此もの田代村百姓江致縁組居候処、夫盲目ニ相成候を嫌候而隙取之為此方ハ奉公を思立候段相頼、甚不人情成ものニ付如此

ハ肥前ハ御買米弐千三百俵御国へ送渡候付、留役大石多兵衛、目付役片山準八郎・御門番勇平・使番多吉・小人種八、明日諸富もろとみへ罷越候段、届申出

四月十日 晴天

ハ外町梅ほかまちと申者、当寅弐十六歳ニ相成、奥役ハ暇出候を此方江召仕候様及相談、親元江ハ柳屋茂兵衛を以相談為致、むめ今朝引越

ハ五島流朝鮮人近々御引渡ニ相成候付、三組〔校訂者注〕ハ兩人差越方長崎役よ

り申来候付、順番之者名前申出候様手代中江申渡候処、御門番仙蔵・使番新八順番之由申出則申付、明後十二日致出立候段相届御勘定奉行嶋井儀左衛門義、今日博多出立、当所西野屋止宿之積先触相達候段、午之中刻比町役ハ申出

但、儀左衛門ハ兩役ハ書状相達、表立入込ニ相成候得ハ地役中并在町役々出迎、於御屋敷手数有之儀ながら、此節無其儀
ハ就右、若党出迎として町口迄可差出候処、忍而入込と相見候付、無其儀

四月十一日 晴天

島井儀左衛門着之届として入来、御国より之御添状御含書等奥役江差出、彼方ハ廻り来、儀左衛門義佐嘉江御用向有之由ニ而直ニ今昼出立有之

ハ太田芝居今日初而見物ニ参ル、尤江口・内山・小藤太・幸之進同道也、奥役ハ敏く被相越居

但、奥役棧敷置四枚、表役棧敷三枚敷有之、毛氈持越掛之、幕張之、夜二入、丸挑灯灯之、蠟燭ハ元方ハ出之

ハ緒方連入来、須惠田原養全方江明十二日罷越度、尤日帰り之心得ニ候得共、先方之時宜ニ依一夜泊り候義も可有之、内々承り置呉候様申聞

四月十二日 晴天 夕方曇 夜半過る降雨

御用日二付、会席出勤

村山東一郎・緒方仙八より田調金筋五千両之内三千両者当月中、

千両八月初旬二掛、千両八十一月、都合五千両之辻調達

可相成哉ニ相見候趣、内山(御役)繁左衛門迄申越候段被申聞

真木村まきむらひろと申者、絹之羽織着物等相用居候付、芝居ニをゐて召

捕庄屋預取斗置候段、警固之目付役前川岸五郎より申出候段、奥

役を被申聞

家内芝居見物ニ参ル、拙者も夜ニ入罷越、奥役八昼を被参、今晚

迄にて芝居日限相済

義倉米拜借ニ出居候内三百七拾四俵上納之分御蔵入取斗候付、立

会之目付役緒方一郎義、奥役江預ヶ有之御蔵鑰請取持参候付開封

先役江口傳御鍵一郎江相渡、御蔵戸前開之錠前之切封江口持参候付受

取、拙者切封持印押之相渡、御蔵詰相済而御鍵封し持参候付封印

持印之いたし渡之、目付役を奥役へ持参預之

但、義蔵開閉之節、手代役・受払留役・目付役立云之先格也

四月十三日 雨天

卯三郎義痔疾ニ付、高良山之山下温石おんしやく之湯江致入湯度相願候付差

免、今朝出立罷越

姫方ひめかた村庄屋梁井武一郎悴軍太義、近来身行不宜自俣ニ令旅行不心

得之次第聞込之筋有之、遂吟味叱度申付方之品も有之候得共、各

別之宥恕を加、真木村江蟄居申付

但、軍太義、筑後松崎之売女を連令欠落居候を岩谷与三右衛門立越、

呼返し来候由

就右、武一郎義、悴軍太示教方大様ニ付、禁足申付

原村庄屋古賀善兵衛義、当時姫方村庄屋兼勤申付

今泉村在帳真木村住居ひろ義、衣服之制度を背、絹服候付、着物

取揚焼捨取斗、其身札之辻ニをゐて三日晒申付

宮浦東村勘右衛門女房、衣服制度を背、絹帯を用居候付、取揚焼

捨申付

就右、宮浦東村庄屋門司武四郎・真木村庄屋原茂四郎・今泉村庄

屋松隈恕助義、村方之示し不行届ニ付、禁足申付

瓜生野村庄屋

真木村庄屋兼勤

青木 東吾

宮浦西村同

宮浦東村庄屋兼勤

許斐 脩蔵

藤木東村同

右之通当時兼勤申付

堀田彦次郎

瓜生野良平と申者、於濱崎借牢取斗居候を爰元へ引取、御門番卯

八・濱崎使番御雇九七郎警固いたし、今日令着候段、届申出

四月十四日 晴天 夕方小雨

〃昨日之降雨ニ而下モ村洪水出、今朝卯う之下刻迄水量木九尺五寸迄出、いまた出増候段、高田・水屋両村之庄屋ら以書付遂案内

〃今泉村ひろ今日ら札之辻ニをゐてさらし、取揚之衣類焼捨取斗候付、目付役永瀬大五郎見分ニ罷出候段申出

〃宮浦東村勘右衛門女房絹帶於同所焼捨取斗候段、大五郎申出
〃江口兵衛且内山入来、盃出ス

四月十五日 陰天 夜ニ入大雨

〃当日之祝詞として手代已下地役之面々并両町役罷出候付、於机之間受礼

〃右相濟而御用日ニ付会席江罷出、御本家御広間ニをゐて孝経且新論（東明節字頭）之講釈緒方連勤之、今日地役中宗旨改取斗候付、奥役・表役出席、遂見分 但、我々平服出席之格ニ候得共、今日ハ当日之服肩衣着之

一 御徒士格式之銘々寄合之間ニをゐて宗旨目錄銘々ら表役江差出候付、披見之上奥役江差廻、見届之証印有之、銘々江被差返

但、此時兩役ハ平日之通、座席ニ相詰居候事

一 御扶持人中ハ御広間南椽頼ニ掛並居、宗門帳手代役ら表役江取次差出、兩役披見いたし手代役江相渡、尤奥役見届之証印
二 不及、畢而誓旨前書神文迄（※）佑筆（※）役読上（以下傍注篇）、相濟而御扶持人中一統部屋棲之銘々ニ至、人每誓旨卷ニ押印血判いたし候事

但、兩役御広間ニ之間御上段を後口にして南向一列ニ出席、手

代役緒方幸之進南椽頼へ相詰

一 生子養育方勤之者共、東椽頼江並居、押印血判いたし候事

但、兩役着座前ニ同断、手代役・目付役三ノ間へ相詰

一 三組之者共、使者之間江並居、右同断

但、兩役着座前ニ同断、手代役・目付役東椽へ相詰

一 御扶持人中并三組家内之儀者手代役・目付役先々江罷越、血判見届候事

〃右畢而佑筆見習前川岸五郎・岩谷鉄之助義、御広間東椽頼ニをゐて役入之誓旨申渡、手代役緒方幸之進侍座、佑筆ら誓旨前書神文迄読上、相濟而銘々血判いたし候を手代役ら取次差出候付、兩役見届候事

〃下モ村出水、昨夜西上刻迄壺丈八寸出増、水量木壺丈三寸ニ而相湛、戌いぬ之下刻より引口ニ相成、今辰上刻迄八寸引、水量木壺丈五寸迄引落候段、高田・水屋みずや両村之庄屋ら以書付遂案内
〃江口、内山江罷越、江口ニ而ハ火術入門等有之由にて酒肴取設有之、被差出

〃今朝大興善寺（だこうぜんじ）入来、菓子一箱持参

〃近来在町之者共不行作ニ有之、且御屋敷内輕輩之者下駄等相用不埒ニ付、右様之義無之様庄屋町役ら堅申付候様手代中江申達、且又輕輩下駄相用候ものハ御門入不為致様、御門番へ申付候様相達

四月十九日 晴天

御用日ニ候得共、差掛御用向無之会席無之拙者御役引受候後、今日も廻在いたし候付、手代役青木小藤太・土地方吟味岩谷勘十郎并先払御門番茂右衛門・鑓持小人貞介・若党兩人・草り取召連

但、拙者を初若党草り取迄握り飯持越、御門番・小人江も握り飯相与、いつも銘々ニ持越候事

帰宅之上御門番・小人江豆腐汁にて夜食中酒振廻

手代役・土地方吟味役江帰宅之上、肴鉢五ツ斗りにて酒振廻

今辰之刻出宅、原・飯田・酒井東西・水屋・高田・曾根崎、ノ七ヶ村廻在、大小庄屋附廻ル、申之刻比帰宅

但、村々庄屋家毎ニ休息、茶菓子・柿餅・味噌漬差出、高田庄屋宅にて持越之瓢箪酒開キ、庄屋より肴五鉢、玉子ふわくにて昼飯差出

飯田庄屋古賀忠四郎方ニ而ハ雄蔵親元之詛ニ依、肴三種・吸物一ツにて酒差出

廻在之村々庄屋帰宅後翌朝迄ニ入来、取次を以礼申出、機嫌をも相伺候先格也、此後廻在之節も同様ニ付、一々不記之

宮浦東村庄屋門司武四郎・真木村庄屋原茂四郎・今泉村庄屋松隈惣助義、去ル十三日禁足申付置候処、此申付禁足差免

就右、他村より庄屋兼勤申付置候もの共、いつも兼勤差免候段、及書達

四月廿日 陰天

今朝平田・内山入来
青木小藤太・緒方仙八・門司金十郎追々入来

同廿一日 晴天

今日田代村・柚比村・園部上ミ下モ小松迄廻在、半着股引ニ而辰之刻過出宅、手代役門司金十郎・土地方吟味緒方一郎同道、先払御門番啓八・鑓持小人喜三治召連

奥役も廻在有之、一同ニ罷越

園部下村大庄屋ノ野九郎兵衛宅にて昼休、肴三種中酒にて小漬差出

園部上村庄屋野田倭一郎宅にて牡丹餅・煮染差出
帰り掛、柚比村分愛宕下にて新筒様し打として江口・内山被罷越

居、見物暮比帰宅

但、同伴之面々取賄、去ル十九日之通ニ付略之、此後廻在之節度毎同様ニ付、一々不記之

四月廿二日 曇天
時々雨降

今日姫方・幡崎・永吉南北・奈良田・長野、ノ六ヶ村廻在、手代役緒方幸之進・土地方吟味緒方連同伴、先払として御門番啓八・鑓持小人種八召連辰之刻出宅、午之刻比帰宅

但、上郷大庄屋ノ野九郎兵衛連帰り、酒振廻

四月廿三日 雨天

御用日ニ付、会席江罷出

手代役村山東一郎・緒方仙八・青木小藤太・門司金十郎・緒方幸之進江左之条々評議申出候様差含

御国より御差図ニ相成居候金千両調達、江口帰国之せつ取帰ニ相成候様いたし度候事

東明館大破ニ付、御茶屋裏手空地江引移并入料手当之事

大川筋岸囲水はね出来候事

下モ村上井築高、利害得失評議之事

入牢之者共裁許筋評議取調之事

文武入料銀借増之事

御国町人久賀屋文蔵悴良介と申者、小倉通々当所へ罷越、先触等

差出通行不心得之者ニ付、手代役江差含及尋問候処、干藻製方心

得居候もの雇下之為大坂へ罷登、長崎へ商用ニ付罷越度、小倉へ

致着候処、諸家御家中江戸下り繁々通駈相見候付、何心なく先触

差出通行念入候旨申出候付、町家之身分先触差出通行ハ不相成事

ニ候間、長崎へ罷越候共先触等差出間敷、且又大坂切手を以九州

長崎江も致通行、後日御国江相響御咎を受候義ハ無之哉致勘弁候

様申聞かせ置候様、小藤太江相達

来月廿九日 兆徳院様(宗門代達)御十三回忌被為当候旨、昌元寺々以書付

申出

姫方村庄屋梁井武一郎義、去ル十三日禁足申付置候処、一ト通叱

り申付禁足差免

原村庄屋古賀善兵衛、姫方兼勤差免

四月廿四日 晴天

宗門改在町共残判之者共、庄屋・座親ざおや召連罷出候付、御本家江出勤、奥役同然よりつき寄附之間鉄砲之間共いふ致出席、表玄関并東手上り口江

手代役・目付役立会、血判・黒判為致、目録ニ引合候事、未之刻

過相済

昨日手代中江差含置候御国より御差図之千両ハ、此せつ壹万俵之

御調米も有之、全数難届相見候間、三百両御仕向ニ相成候ハ、調

達方心配可致との趣東一郎及示談候段仙八申聞候付、右金子之儀

ハ江口取帰之儀御差図ニも相成居候事故、江口如何可被心得候哉、

猶又内意被相同度之旨返答、則江口江相伺候処、三百両にて可宜

旨被申候由、奥役列席江仙八罷出申聞候付、左候ハ、調達方東一

郎申談心配候様ニと相達

但、返弁方ハ此せつ壹万俵調達ニ付、両郡米五千俵と御任之分を以手当

之儀申聞、承届

岩谷三左衛門義、両郡御米取立相済、肥前通々今夕帰郷之段、届

有之

四月廿五日 雨天

昨日の首筋痛、起居相成兼候付、荒木安易相招、服薬(田代町居住、外科医)

、岩谷三左衛門入来対面、濱崎之体勢申承り彼地逗留之間ニ左之
廉々取斗候旨申出

一 備米取立之事、尤五反田村横田上村手入ニ有之候由

一 横田川堰浚取斗、人夫式千四百人余ニ及候由

一 横田上村江滞在之厄惠豊、神託之話

、目付役緒方連・原栄左衛門・片山準八郎入来、永吉南村喜平治・
筑後領貞右衛門義、夜前稽古場ニをゐて僉議、口書差出

四月廿六日 晴天 朝之内
雨降

、御用日ニ候得共、就病氣会席致不参

、帰府御勘定杉本金六郎殿、御普請役赤林門一郎殿、今晚当所止宿
之積先触到来之段、町役より申出

、就右、御使者勤之儀、拙者病氣ニ付、内山繁左衛門江繕勤之義、
手代役を以申遣

、昨日も降雨にて下村出水、今卯上刻迄水量木壹丈壹尺五寸出、
追々出増候旨、水屋・高田両村之庄屋も及案内

、内山養子、今日婚姻被相整候由

、村山東一郎・緒方仙八・岩谷三左衛門・緒方幸之進見廻として入
来致対面、青木小藤太取次にて見廻申聞

四月廿七日 雨天

、内山見廻として入来、岩谷三左衛門・門司金十郎・青木小藤太入

来、致対面

、下モ村出水、昨日五寸出増、壹丈式尺にて相湛、今朝ニ至五寸引
残、水量木壹丈壹尺五寸ニ相成候旨及案内

同廿八日 晴天

、内山入来、日田御借金到来之上ハ肥前にて買米可取斗旨相談有之、
同意之段及返答

、緒方仙八入来寛話、格式之面々と御扶持人中之差別混乱階級不相
見、妻子着服等ニ至差別有之度旨内話、草野作之進婦郷方評議之
事并御借米之内ニ御領中持困之米も有之候ハ、他領直段を以現
金相当御買上被下候ハ、御領中之繰合も可相成哉内評可然旨
及内話候処、今晚梯源七郎宅にて地役中寄合旨之筈故いつれも及内
評可申出由申聞

、宮浦東村社人のき
たみま穉田美作、例月之通入来、机之間ニをゐて被相務

四月廿九日 陰天

、兆徳院様御忌日ニ付、昌元寺江御寺詣之筈ニ候得共、御用有之無
其義

、今朝御国御左右相達候処、爰元御屋敷御改建ニ付、奥役已下地役
之面々ニ至御沙汰筋被仰付越

、三月廿三日伊奈村河馬鱈浦之冲江異国船都合七艘相見、長崎御奉行江
被及御届候付、聞役江之御状箇々相達

、当月九日・同十二日御国東西沖江異国船五艘相見、右同断長崎間
役江之御状箇相達

、下毛村出水、夜前迄(筑後川)大川江引落候段遂案内

、岩谷延之允義、去ル戌年松浦・怡土山潮荒所開発方ニ付令精力候
付、悴義一生御徒士格被仰付候段、御国与頭ヲ被達越候旨相届

、大石洩之助・大石多兵衛儀、御屋鋪御改建(御注)ニ付普請掛相勤、入料
銀積式千七百兩余相減候段一廉之事ニ付、一生御徒士格被仰付候
段、御国与頭ヲ被達候段申出

但、本文御普請料式千七百兩相減候と申ハ最初之積前、実ハ如何敷相

見候事

、日田御借金五千兩之内三千五百兩、荒木繁右衛門夜前取帰り候由、
村山東一郎入来申聞

但、御国ノ御差函御米一万俵買調用也

、玄関番緒方隼太義、松平肥(左嘉藩主)前守様江被遣候御直書一箱・大油紙三
枚佐嘉へ差越候付御使申渡、御門番勇平・小人新平宰領として召
仕、明朝出立いたし候旨届申出

、表役江口傳義、間掛之御用向有之、交代之上今四五ヶ月滞留之儀
御国へ伺越置候処、御間届被成、傳へ御達越相成候旨被申聞

、去冬拙者当所へ被召仕候節、金千兩調達方之義御含有之候処、
追々御借財之末にて全数ハ決而難相届何分五百兩成り共御借金之
義専致手立居候付、調達次第追々差送可申、就夫右御借金御返下
之義如何可被仰付候哉、於爰元ハ御收納引当ニ当冬御返済之極

借入不申候而ハ調達不仕候付、当冬現米返済可仕候哉、左候ハ、
御米繰手詰之央懸念も仕候間、右之通難被仰付御事候ハ、今度御
軍用米調達年割御返済用兩郡米五千俵充為御任被下置候付、此節
之五百金も元歩御返下之積りニ被仰付如何可有御座候哉、尤五千
俵米直段ニより年延ニも可相成候得共、当時之義ハ此元ニ而変通
仕置、別段当冬御返米ニも及間敷致評義、其段以書状御支配へ伺
越候事

、奥役入来、内山同断、暮方岩谷与三右衛門来ル

四月晦日 雨天

、平田淳一郎殿、今日より手習として入来有之
、門司金十郎・岩谷勘十郎・緒方織衛入来

五月朔日 曇天

、当日之祝詞として手代役已下地役中一統・養育方・両町役中罷出
候付、於机之間受礼

、右相済而奥江罷出、於御広間孝経且新論之講談緒方連相勤
、於御広間左之通受礼、奥役同然麻上下着二ノ間江出席

但、格式之面々受礼ニ付、麻上下着也、御扶持人其外之受礼ハ羽織袴平
服之先例也

一生御徒士格
一生御徒士格
大石洩之助
大石多兵衛

右之面々昇進被仰付之御札、御広間南椽類より申出

、右畢おわて而親類之銘々於寄合御札申出、測之助・多兵衛へ奥役より口祝被遣之

、右二付、兩人より扇子式本宛髪斗包添、台所を以取次差出

、生子養育方郡目付兼帯荒木吉治義、商売方取纏之末令旅行、追々逗留延等願出、其上眼病相煩、役義断申出、願之通兩役共差免

五月二日 晴天

、青木小藤太入来、奥役を今日太田後口にて鉄砲稽古打被致候由申来

、下モ村出水、昨朔日申之下刻過老尺出増し、同刻水量木壹丈一尺五寸出相湛、酉上刻を引口相立、今二日辰之刻迄五寸引、同刻残水量木壹丈一尺迄引落候旨、水屋・高田庄屋を遂案内

、城戸村茂八義、兼々人柄不宜、真木村を所替申付置候処、去年七月瓜生野町橋本来助方江被雇居候内、同人自作之田所養水通方

二付、井樋猥に取扱、剩八坂甚兵衛方江立越様々狼藉之拳働に及候段相聞、不埒のもの二付、入牢申付置候得共、出牢之上宮浦西村之内陣屋江流罪申付

、昼過比手ころ代方・書札方退出之義相届候処、昨日及評義候賞罰之取調も不致退出候段如何敷次第二付、手代役申遺頓而仙八入来二付、右之次第申述候処、今日奥役他行二付右取調明日にも相成可宜旨申聞候付、奥役八鉄砲打に他行有之候迎、手代方書札方被引取候

訳者無之、御用向取調、例刻被引取候様にと相達

、緒方隼太・御門番勇平・小人新平、佐嘉より帰郷之段届申出

但、隼太義、格分知行佐嘉にて問合有之候付、任先例中小姓五十石と

答候由、右先例と申八先般原榮左衛門御状使に初而罷越候節如右相答候と相聞候処、兩役を差図有之居候事共不相聞、甚心得違之事共也

五月三日 晴天

、荒穂宮いみさい齋祭二付、守札并神酒一对、先例之由に而社人梶田美作より来

但、齋祭二付、当月朔日を一七日之間上郷村之田島に入り不申、古例之

由

、下村出水、夜前迄川内江引落候段、水屋・高田庄屋を遂案内
、爰元御屋敷御普請二付、出精之面々御沙汰筋之義、左之通申渡

鳥目八百文

目付役 八坂 雄也

同五百文充

博多御門番 江崎弥忠太

爰元在勤之節骨折候付

篠原喜代八

平日袴着用

御門番

卯八

御門番格

使番

安右衛門

鳥目貳貫文充

同老貫文充

鳥目八百文

悴代迄家内共席上改
申付別段米三俵褒美
として相与

一生家内共席上改

其身一生席上改

鳥目五百文

同老貫五百文充

御門番

小人

勇平 新平 種八 貞助 勇吉 金平

姬方村庄屋

梁井武一郎

城戸村

清左衛門

田代村同

甚七

神辺村

勝兵衛

曾根崎村大工

定藏

小倉村木枕

茂平

園部上村

甚作

同五百文

田代村左官

伊平

使番崎藏義、御門番格申付勤向者是迄之通相心得候様申付

小人喜三治義、勤向者是迄之通ニ而使番格袴着用差免

岩谷延之允義、櫛方・考鑑方申付置候処、就病氣役儀断願出候付、

御国江可伺越、就右悴宇佐美義、玄関番仮役申渡

但、宇佐美義、此度御徒士格被仰付候付而ハ、親延之允御扶持人ニ而ハ

難相勤訳ニ相成候故、此せつ退身之義願出候也

御扶持人中之儀ハ御奉公出且差免等之義無之、役義断申出候へハ則奉公

赦免ニ相当り候事已前ハ仕来之由、近年之所にてハ色々模様も有之と

相聞候得共、夫等ハ格式之人も追々被仰付候故と相見、此せつ手代

中ハ申出之通、延之允退身之儀、古格之通ニ相成候事

五月四日 晴天

御用日ニ付、会席出勤

酒井西村庄屋磯野孫六義、川方内談役見習申付

祇園会之節、昨年迄ハ子供躍令興業候処、前広ハ稽古等彼是物入

多く五町一巡昨年にて相済候付、当年ハ旅ハ躍いたし候もの相

雇、六月十二日・十三日当町祇園社境内ニをゐて兩日興行、十四

日・十五日瓜生野町にて興行御免被仰付被下候様、町役ハ令内願

候段、手代中ハ申出、承届

但、已前八躍・芝居等之義無之候処、十ヶ年前ダンシリ引、五ヶ年之間

五町一巡相濟、夫の子供躍と相成候由也

、岩谷宇佐美義、今般御徒士格被仰付候礼申出候付、奥役同然麻上下着御広間二之間へ出席、宇佐美義三之間へ罷出手代役元村山東一郎披露、之畢而寄合之間をみて親類之罷出候付謁之、相濟而宇佐美へ奥役の口祝被遣之

但、就右宇佐美の扇子式本、水引結のし包添以取次差出

、御勘定奉行島井儀左衛門、佐嘉の帰郷西野屋へ町宿也

但、忍而之通行故地役中已下出迎等無之

、今晚鳴井帰郷届として、入来二付盃出之、内山も入来也

五月五日 晴天

、端午之祝詞として地役中罷出候付、拙者麻上下着二而受礼、左之通

一手代役格式之面々、机之間次へ折廻り二列座、拙者本間江罷出、筆口之人の端午之御祝申上ますと申聞候付、目出たふと

演説

一御扶持人中・大廻船差引役青木厚三郎幼少ニ付不能出表次ノ間へ列座、

右同断

一東明館訓導師青木文造、右同所へ罷出、手代役青木小藤太披露

露

一生子養育方、右同断

一御目見医梁井吉十郎、右同断 但、幼少ニ付不能出

一役医中、右同断

一同格中、右同断

一郡目付中、右同断 但、当病一人も不能出

一留役所書手谷口喜十郎玄関之間江罷出、右同断

一三組中内玄関之間へ罷出、右同断

一馬医江崎五七郎表次ノ間へ罷出、右同断

一同格源四郎、同所の右同断

一田代町役中、同所の右同断

一瓜生野町役中、同所の右同断

一三郷大小庄屋中、表次ノ間へ玄関番之間二掛罷出、右同断

但、小庄屋八三ノ間へ罷出格二候へ共、今程六十身分人格之者も有之候付、

如本文

一庄屋子供中、表玄関之間へ罷出、右同断

一庄屋格中、右同断 但、今日一人も不能出

一平之者中、右同断 但、右同断

(上欄) 平之者ハ今日可能出敷、吟味之事

、右受礼畢而御本家へ罷出、於寄合之間奥役面会、互ニ祝詞申述口祝出候付、拙者の奥役江挟之、奥役の拙者へ被挟之、引統賄役并手代已下格式之面々、用銀掛・受払留役・佑筆・考鑑方・玄関当番迄奥役の口祝被遣之

但、御本家へ罷出候節、五節句ハ鍵箱為持之先格ニ候得共相省、若覚兩人・草り取斗り召連

、口祝之節、格式之面々脇差之俛、御扶持人中八次ノ間へ脇差を抜、本間へ罷出

、御賄且御茶屋江口江も為祝詞罷越

、島井、旅宿へ着之祝詞相束奥役・賄役同然罷越

、節句ニ付、煮染一鉢・酒宴盃一出来置、入来之面々江盃出之

、拙者去冬爰元へ被召仕候節、金千両調達差越候様御支配も御含ニ相成、其内三百両ハいつれ之道調達之筈評義相成居候処、江口より心付申来候品も有之、今式百両相増、都合五百両之高心配之儀、

仙八・東一郎其外手代中江於云席差召

、嶋井儀左衛門より於佐嘉米三千俵調達、代金百五十両八当金相渡、其余ハ御国々木綿可差送候間、爰元も引合置呉候様との義示談有之、評義之上、儀左衛門江三役面会及応答

五月六日 晴天

、奥役入来、今日三国境へ鉄砲打ニ罷越度、青木小藤太・岩谷勘十郎致同伴候間、差掛候御用向等宜心得呉候様ニと被申聞、内山繁左衛門も入来、奥役同然三国境へ罷越候段被申聞

、家内今日昌元寺庵江釜座頭聞ニ參ル、奥内室噂ニ依而也

、今夕島井儀左衛門入来、緒方仙八同断

五月七日 晴天

、今朝緒方仙八入来

、島井儀左衛門御賄へ被參候付申来、奥役同然罷越、盃出、汁子餅有之、奥役より切すし、志シ有之

、堀江安太郎目療治として須恵へ參り居候処、今夕爰元へ立越、此方江止宿御国町人春田住介と申者介抱として附添、老州茂四郎と申者供ニ召連居、両人ハ梅屋へ止宿也

、今晚奥役入来有之

五月八日 雨天

、堀江安太郎肥前下野、目医師へ罷越候付、御門番勇平江同伴相頼

但、駕籠夫四人、町雇賃錢老人ニ付、百式十文と四人にて四百八拾文与之

、今日御用日ニ候得共、差掛候御用無之、手代中ハ五百両御借金筋ニ付、三郷大庄屋応対之御用有之、早々退出度旨申聞候旁ニ付、寄合欠席之儀、奥役江被申出置候様ニと仙八江差召置

、島井儀左衛門江及噂入来、すし・酒等差出、奥役・内山も入来有之

、御門番卯八明朝出立、下モ関へ罷越候段届ル

、小人種八、御国江近々罷越候付、御用向被仰付候へと申聞

五月九日 雨天

、啓祐院様御忌日ニ付、昌元寺江御寺詣可致之処、今日無其義

、受払留役梯源七郎義、此度島井儀左衛門買米三千俵引合之為左

嘉江差越、尤儀左衛門相談口高直ニ付金善へ及相談整候ハ、佐嘉
之方ハ及破談候様差含、今日出立申渡、右之趣早朝岩谷三左衛門
申遣相達

〆岩谷三左衛門、今日下モ村廻在之段申出ル

〆今夕奥役にて嶋井江餞別有之噂ニ依罷越、賄役も来ル

五月十日 晴天 朝之内小雨

〆今朝青木小藤太・門司金十郎入来

〆岩谷三左衛門入来、昨日下モ村廻在之模様申出

〆緒方仙八入来、原榮左衛門・岩谷与三右衛門作事掛本役成之儀伺
出候付、奥役江も申出同意ニ候ハ、当使伺越ニ相成候様可被取調
旨及返答、目付役永瀬大五郎・原岡嘉一郎・梯真郷・八坂雄也・
櫻井孫平本役成之儀をも申出、大五郎・嘉一郎・真郷義ハ存寄無
之、雄也・孫平義ハ兼々勤向不精ニ相見、式日出仕等も不致候得
ハ、本役成之評義如何ニ可有候哉、猶奥役江申出存寄被申聞候様
ニと相達候処、いつれも拙者心付之通被心得候との義、又々仙八
入来申聞

〆江戸表佐須伊織殿（江戸諸家老）より四月十四日之御状相達候処、去ル六日京都

大火 禁裏御所炎上、此方様御屋鋪ハ無別条、尤 禁裏炎上ニ付、

鳴物三日御停止、普請ハ不苦段被仰出候間、御領中相触候様ニと
被仰下

〆酒井東村幸兵衛娘当年六歳ニ相成候処、昨夕川江落込溺死候段庄

屋ノ遂案内候旨、門司金十郎申出

但、如本文幼少之者にて溺死無相違候へハ見分人不差出、死骸勝手次第
葬り候様申付候先格之由ニ付、其通相達

〆今夜奥役入来有之

五月十一日 晴天

〆作事掛岩谷与三右衛門義、高田村園川水道普請ニ付罷出、遠方故

居留之儀申出、承届

〆禁裏御所炎上ニ付、鳴物停止之義、爰元并松浦・怡土両郡触達之
儀申渡

〆今日御国仕出取斗、左之条々御支配へ申上

一 村山東一郎・緒方仙八御呼取御達被成候米壹万俵調達之義、

日田ノ金五千両借入出来候付、壹万俵高追々調米差送可申、

尤御借金返済之手当ハ兼々御差込之通、両郡御收納之内元（利）

返済迄年々五千俵御任可被下候事

一 去冬垣右衛門被召仕候節、御差含有之候金千両調達之義、全

数ハ難出来候得共、五百両ハ何分ニも心配仕調達次第追々差

送可申候事

一 奥御用ニ付、櫛銀札之主向を以、年々米千三百俵御受込之儀、

年縮メ且千三百俵之内千百俵ハ御国江送渡し式百俵ハ爰元へ

引残候様、東一郎、仙八帰郷使御支配より御差含有之、御用

人ノ被差含候次第、何分心配相尽御安心ニ至候様可取斗候

事

一岩谷与三右衛門作事掛掃役、原榮左衛本役成之事

一永瀬大五郎・原岡嘉一郎・梯真郷、目付役本役成之事

五月十二日 晴天

御用日ニ候得共、差掛候義無之、会席相見合

御借財払潰主向之内、為御任米式千五百俵を入札扱いたし六ヶ年之間見積之外年々金三百兩充生財之主向相設有之候処、何分見込通難相成候付、今日於東明館大庄屋・農政・兩町別当・座親召寄及評義候段、仙八ら申出

島井儀左衛門入来、明日如博多出立之段被申聞

内山入来

今晚嶋井江為暇迄罷越

五月十三日 晴天

嶋井儀左衛門義、今朝出立二付、為見送昌元寺町外レ迄若党差出

堀江安太郎今辰之刻比出立、博多之如く罷越

手代役門司金十郎、河内村主法米渡として罷越候旨申出

梁井武一郎悴軍太、真木村へ蟄居申付置候処、一昨十一日之夜寢

所を拔出行衛不知由、村山東一郎ら内々申出

牛馬買入二付、在町拝借銀今日渡方取斗、請取之書付手代役青木

小藤太・用銀掛松隈文三郎ら差出、披見之上直ニ差返

博多御門番江崎弥忠太内用有之、夜前は元へ罷越候由にて入り来

河内かわち・永吉兩村・蔵上・養父、都合五ヶ村江主法米渡として手代

役・目付役罷越、与米面付帳面を以申出

夕方裏より内山江罷越

五月十四日 晴天

酒井兩村・藤木ふじのき兩村主法米渡として手代役・目付役罷越、与米面付差出、披見之上差返

用銀掛松隈文三郎・目付役緒方一郎義、御軍用米仕出二付、久留米くわいより之買米為受取明十五日瀬くわい之下江罷越候段届申出

小人種八義、右買米之内式千五百五十俵宰領申付御国へ差越、明

十五日令出立候段、届申出

五月十五日 陰天

当日為祝詞地役中并兩町別当座親町年寄罷出、於机之間受礼

右相濟而御本家江罷出、於寄合之間輿役出云

講師緒方連病氣不参二付、講談無之

草野作之進義、主向筋二付登坂いたし居候処、御用筋順便之都合

二不至、追々帰郷之儀手代中江相達候得共其凶にも不至、段々無

何い令逗留居候中、爰元江一応之不経伺して谷町御代官所江金式

千五百兩拝借之義願出、甚敷八爰元庄屋名前押印之願書差出、剩

村山東一郎其身連名之書面をも差出、彼是不心得之人二付、差扣

之俣帰国申渡、尤外向懸合之儀も有之候ハ、相慎致応対、主向筋之義ハ相見合置、早々帰郷いたし候様可被達越旨、手代中江申渡

高田村先之庄屋青木与三左衛門義、宗旨心得違之義有之、去ル亥年蟄居申付有之候処、神妙相慎居候と相聞候付、此節蟄居差免

酒井村庄屋磯野東作祖母・長野村栄左衛門・忠四郎義右同断ニ付、他領徘徊差留有之候処、此節他出差免

酒井西村(空白) 子供六歳男子、溝ニ落入相果候旨庄屋カ案内申出、別而訝敷義も無之相聞候付、死骸勝手次第取收候様被仰付度之旨、門司金十郎より申出承届

手代中御用多長詰ニ相成候付、引取掛一統相招、湯素麵にて酒振舞

五月十六日 陰天

今日左之村々廻在奥役も被參、手代役青木小藤太并御門番茂右衛門・小人治兵衛召連、牛原村カ四阿屋宮參詣、夫より道光山皿山見分

萱方村 古賀村 牛原村
養父村 蔵上村 宿村

蔵上村庄屋磯野百助宅にて蜜焼酎・茶漬差出
但、百助義、奥役江出入之者ニ付、取扱候歟

帰宅之上、小藤太并御門番・使者へ例之通酒・飯振廻
養父郡大庄屋吉松源次郎連帰り、机之間ニ而小藤太一同酒振廻、素麵等差出

五月十七日 晴天

浄元院様御向月忌ニ付、麻上下着、奥役同然昌元寺江御寺詣仕
義倉米百六拾貳俵壹斗壹升貳合七勺三才蔵詰取斗、手代役緒方幸之進・受払留役大石多兵衛・目付役梯真郷立之云、御蔵鑰并切封共真郷取扱、尤今日迄ニ蔵詰高左之通

粃千拾七俵 去丑冬蔵詰之分
米五百三十六俵

内三百七十三俵 先達而蔵詰ニ相成歟
同百六十式俵余 今日蔵詰之分

五月十八日 晴天

義倉米之内五百三拾六俵ト壹斗貳合七勺三才食用拜借申付蔵出し取斗候付、手代役門司金十郎・留役大石多兵衛・目付役片山準八郎立云、御蔵鑰開閉切封等先例之通、準八郎取扱

濱崎御役場守栖崎市助妻子、爰元へ罷越候由にて入来、為土産雪駄一足持參

平川一桂入来、拙者頃日カ不快ニ付脰脈(診)
瓜生野町主法米として手代役緒方仙八・目付役永瀬大五郎出役之

段申出

五月十九日 陰天

御用日ニ付、会席江罷出

酒井西村庄屋磯野孫六義、川方内談見習申付候付、川方御用之節
二限、引兩御印附手挑灯相用候義御免被仰付被下候様願出、願之
通差免

使番崎藏、肥後日数十五日入湯御免之義願出差免

平川一^(マ)圭より服薬申請

五月廿日 陰天 朝之内雨降

御軍用米之内千式百五拾俵仕出取斗候処、三組人少ニ付、拙者御
国^ノ召連候若党卯三郎義御雇宰領申付差越、今昼諸富之如く致出
立

同廿一日 陰天

松浦・怡土兩郡大庄屋より田根付夫食、松浦十一ヶ村へ米四百六
拾四俵、怡土郡九ヶ村江三百五拾八俵拜借之義願出候得共、御備
米千八百俵之三歩方、兩郡ニ而五百四拾俵拜借申付

田代町まつ母、日雇稼として御国江三ヶ年限罷越度之旨、町役^ノ
願出、聞届

但、此もの八卯三郎連歸り候由也

博多御扶助米四俵差送候付、^(原前)原田番所通切手之義申出、書札方^ノ
相認差出候付、押印相渡 ^{はるた}

姬方村庄屋梁井武一郎悴軍太義、身行不宜候付、真木村江蟄居申
付置候処、当月十一日令欠落候段、同村庄屋より遂案内

永吉^{ながよし}南村喜平治と申者、奈良田・永吉兩村ニ而追々令盜候段相頭
候機会を考、毎度逃去、頃日立歸居候を役筋^ノ召捕、段々及吟味
候得共、虚偽を設再三責問之上終^ニ令白状、元来不人柄ものにて

吟味中役人を蔑^ニいたし重々不埒之族ニ付、出牢之上^{ホタシ}鋏
責鞍用之押掛一ト通、右手之品青木小藤太心配を以、金^ヒ老步式朱
ニ調之

五月廿二日 陰天

今日左之村々廻在、手代役岩谷三左衛門并御門番茂右衛門・小人
貞助罷出、帰宅之上、飯・酒振廻

宮浦東村 同西村 城戸村 小倉村

歸り掛、今町平川一桂宅江休息、茶菓子出ル、夫より^(マ)溜石通り帰、
田代村庄屋にて休息、八ツ半比帰宅

梯源七郎早津江^ノ帰郷之段届申出、米三千俵之相談極ル

去夏御国六十人^(身分)亀谷喜右衛門方江盗人入、金八百五拾兩被盜取候
処盜賊相頭、忝州九十郎并清介と申者唐津領殿之浦と申所にて召
捕候を濱崎目明嘉平貴受、於濱崎借牢入牢申付置候旨、横目勇八
郎^ノ手代中江案内申越候段申出

、日田御借金之内五百兩、広瀬源兵衛を送り来候由、是にて四千兩
ニ成ル、残る千兩ハ来ル十一月借入約定也

但、御借金五千兩調達之内、去月廿八日三千五百兩此せつ五百兩都合
四千兩之辻受込、残千兩ハ十一月受込、早津江井手善兵衛へ返弁之積と
相聞

、宿村主法米渡として手代役緒方幸之進・目付役助勤櫻井孫平出役
之段申出

、御国留守を書状相達、無事之段申来、氏江典膳殿参判使として朝
鮮へ御渡、四月廿二日御国出帆、同廿四日渡海ニ相成候由

五月廿三日 陰天 未之刻過る雨降

、御用日ニ付、会席江罷出

手代役

村 山東一郎
緒 方 仙八

請掛留役

梯 源七郎

用銀掛

松 隈 文三郎

右者爰元御建家御入料銀浮出之分爰元へ引備置候ハ、来聘御用御
取遣可被候間、御便利之筋致評義積金いたし候様、御国元を御差
図有之候付、右之面々積金御用掛申渡、

、田代町新組足輕利助と申者、断申出、聞届

五月廿四日 晴天

、上郷大庄屋ノ野九郎兵衛入来、頃日廻在之節、願置候城戸村庄屋
梁井三郎兵衛所持之荒穂宮建立記持参

、宮浦東村庄屋門司武四郎悴益五郎、当寅十九歳ニ相成候を緒方仙
八世話にて当時若党ニ相雇、今日武四郎同道引越

、加布里村東屋政右衛門を米貳千五百俵買入之儀及相談候付、品位
見分延買之儀咄合之為メ幡崎村庄屋天本勝兵衛罷越候様申付候
処、病氣ニ付実父下郷大庄屋天本素六兼而兩郡之御用取次もいた
し候事故、召仕方手代中へ申出、聞届

、就右、素六届として罷出候付、酒振廻

、宿村零落相見候付、緒方仙八存寄申承

五月廿五日 晴天

、園部上村田根付昨日迄ニ相済、同下村・宮浦東西兩村・城戸村、
今朝迄相済候段、庄屋を案内申出

、昼後を太田江遊歩、奥役・江口・内山同然罷越、松田小十郎屋敷
江参り候処、温氣強く候故太田觀音籠堂江罷越、暮比帰ル

但、弁当重ニ煮染、尾早岐・酒・饅頭等持越、緒方幸之進・大石測之介
同伴囲碁、手代中へ鉢肴・白酒・蜜焼酎等持参、仙八・小藤太・三左
衛門・金十郎入来

五月廿六日 晴天

御用日二付、会席江罷出

但、拙者勤掛已後、奥役不断所之寄合ニ候得共、申談候而今日より寄合之間へ罷出

勸農方心付之次第申候様、奥役も手代中へ被達

宿村成立方并庄屋心入之儀、村山東一郎江差含

原村庄屋格礼席酒井与八郎と申者、就病氣礼席断之儀願出、則願之通差免

緒方喜内義、讚州金毘羅江参詣差免置候処、夜前帰郷之段届申出

五月廿七日 陰天 時々雨降

河内村・神边村在廻、今卯之中刻出宅、午之刻過帰宅、手代緒方

仙八同伴、御門番茂右衛門・小人佐次郎召連帰宅之上、例之通酒飯振廻

神邊庄屋島清九郎宅にて玉子ふわく、味噌漬にて昼飯差出、中酒・素焼酎也

同廿八日 陰天 時々雨降

今朝、緒方連来ル

大石多兵衛・緒方連義、御軍用米買入二付、明朝加布里江出立之段、届申出

但、千五百五拾俵買入山城卯兵衛手船徳若丸船頭常治船其外借船を以

彼地より御国江送渡候筈也、宰領ハ爰元三組人少故濱崎使番召仕方、内

山与次右衛門へ達越

明廿九日 兆徳院様御十三回御忌被為候付、今夕も於昌元寺御法事有之候付、御茶・御香奠被相備、御使玄関番相務

宮浦社人穉田美作入来、例月之通於机之間祓幣之備物定式之通也、畢而出来合之飯振廻

五月廿九日 晴天

兆徳院様御拾三回御忌御法事二付、奥役・江口・拙者一同長袴着にて昌元寺江参詣、御霊前三之間東内仏之間へ居着、頓而勤行始り候付三ノ間江西向ニ相詰、勤行畢而諸宗諷経有之間席狭く候付、内仏之間へ相詰

諸宗諷経畢而奥役御代香被相務、相濟而自拝、引続拙者御次式置目ニ罷出拝礼、江口同断、夫も地役中・六十人格・在町役々、拝礼之間、内仏之間へ相詰、畢而帰宅

御寺江手代中先達而相詰居、手配宜候旨案内申越候上ニ而致出宅候事

昌元寺門前江在町役中迎送、手代已下地役中いつれも玄関前迎送之事

昌元寺住持式台へ迎送罷出
供廻り若党兩人^{麻上下}草^{着之}り取道具箱為持候事

但、鍵持小人貞介罷出、箱持八町も雇入、賃錢六十文与之

立傘為持候筈ニ候得共、致省略

小人并箱持へ帰宅之上、豆腐汁にて飯振廻

御香奠六錢壹匁五分、御菓子十文之饅頭六献備仕、若党使を以、

今朝先達而昌元寺へ為持遣

長野・奈良田・柚比・金丸・牛原河内、六ヶ村田根付相済候段、

庄屋案内申出

荒穂宮建立記、上郷大庄屋野九郎兵衛へ致返却

六月朔日 陰天 時々雨降

当日之為祝辞地役中并養育差配役・両町役罷出候付、於机之間受
礼

会席江罷出、尤今日講談日ニ候得共、緒方連旅行ニ付、無其儀

奥御用櫛主向之儀、手代中評議之趣申出、櫛持中蠟屋印錢

取立之義、内分諭達被致候へと奥役同然相達

勸農方之義、奥役より頃日被差含置候通、精々評議申出候様手代

中江相達

御国仕出定日無之、自然と御用向申上候義及延引候付、向後毎月
四日十九日両度月並仕出取斗候様及評議、其段致張替置候様、佑

筆緒方織衛へ申渡

神辺・萱方・古賀三ヶ村、昨日迄田根付相済候段、庄屋届申出

永吉両村・飯田村、右同断届申出

江口入来盃出之、内山も申遣入来也

祇園社僧^(松林院)例年氷餅来候由、浅野種右衛門・橋倉勝右衛門在勤覚

書ニ相見候得共、無其義、江口江間合候得共、近年其義無之由被
申聞

六月二日 晴天 夜半大雨 雷鳴

今日左之村々廻在、手代役門司金十郎・土地方吟味役緒方一郎并
先払御門番茂右衛門・鎗持小人貞介召連

鳥栖村 藤木両村 今泉村 真木村
安楽寺^{あんらくじ} 瓜生野村^{うりゆうのむら} 瓜生野町^{うりゆうのまち}

真木村庄屋原茂四郎宅にて昼飯、玉子とじにて小漬・中酒・焼酎
出ル

瓜生野町原忠藏方へ塩硝焚見物ニ立寄、盃出ル

帰宅之上、金十郎・一郎江盃・浜焼・素麵等差出、御門番・小人、

飯・酒、例之通振廻

今日迄にて勤掛初而之廻在一巡、無滞相済、曾根崎・原・姬方・

田代・養父五ヶ村、田根付相済候段、庄屋届申出

六月三日 晴天 朝之内雨降

村山東一郎宿村へ罷出候段、届申出

緒方仙八・青木小藤太入来対面

門司金十郎・緒方一郎・大石測之介・瓜生野町原忠藏、昨日之礼、

取次にて申聞

河内村昨日迄田根付相濟候段、庄屋届申出村山東一郎ノ宿村主向
ケ条帳并同村作畝高・牛馬数取調且養父郡村々体勢等書付、内見
ニ差出

御国御左右有之、留守状相達

今晩奥役入来有之

六月四日 陰天 時々雨降至而小雨也

御用日ニ付、会席江罷出、賄役も出勤也

生子養育料渡方相滞居候由ニ付、急速渡方致評義候様、手代中江
申達

今朝岩谷三左衛門、緒方一郎入来対面

六月五日 陰天

青木小藤太、木山口主向筋為取調罷出候段、届申出

岩谷三左衛門、上郷廻在之段届申出

御国仕出、昨日迄之日付にして今日仕廻切ニ相成、宗旨目録式十

七冊・人高目録四通差送ル

右便留守状并海防書類八冊、東一郎へ送り返ス

六月六日 雨天 少々雷鳴
夕方晴

宿村、藤木上三分田根付相濟候段、庄屋ノ届申出

今朝緒方仙八入来、致対面

青木小藤太、木山口主法米渡帳持參、証印致ス

去冬拙者へ御含有之候金千両之内五百両調達方相尽可申旨、御国
江申上置候内三百両、此度加布里ノ買米を以差送候御軍用米、宰
領之者へ相渡差送、其段御支配御用人御勘定奉行所へ書状差出

但、残式百両ハ江口傳歸国之節差送候筈申上

右三百両為宰領小人貞介申付、田中村迄差越、明朝出立申付

六月七日 雨天 雷鳴

緒方一郎入来、兼而相含置候宿村之儀取調申出

一 永瀬此右衛門殿格ニ申付候故、夫ノも吾一郎を庄屋ニいたし
度相存候者も有之と相考候事

一 吾一郎義、百五十両程借金有之由

一 辛卯年主法立已来、作畝三町壹反壹畝、此高四十三石九斗式
升式合、他村掛持高ノ買入相増候へ共、多分ハ枝村車路くろまて買
入、宿村ニ而者浪江・弥三次、少々買入居候と相聞

一 鍛冶職伊七と申者組頭相務居、此もの元来人柄不宜ものにて
吾一郎ニ附従、此右衛門を嫌候哉と相聞

一 吾一郎持分作畝式反五畝悪地にて可売拵逆も金子を付ケ不申
候而ハ請手無之程の地位ニ候由

村山東一郎入来対面、宿村之体勢申承候処、一郎ノ申聞候趣致符
合候付、此上成立之道思慮を加申出候様相達

緒方一郎・岩谷勘十郎・岩谷与三右衛門・大石測之介・荒木平

内、下モ郷廻村致し候処、昨今之降雨出水ニ而所々川岸及破損候由申出、門司金十郎入来、溺死之者救法為写取、村之庄屋へ懇ニ言聞かせ、右之療治にて若も蘇生いたし候ハ、本懐之至存候間、広く相用試候様、取斗方差含

平田要殿先月廿日御当職御免被承仰候段、御左右達

六月八日 雨天 夕方晴

御用日ニ付、会席江罷出

近日之降雨にて下モ村洪水、昨七日申之上刻迄、水量木一丈出水之段、高田・水屋庄屋ハ以書付案内申出

下モ村出水、今朝ニ至三尺出増、水量木壹丈三尺出候段及案内

下モ村洪水為見分罷越、手代役青木小藤太・岩谷三左衛門・門司金十郎・緒方幸之進同伴、先扨御門番直右衛門・鏑持小人召連、

酒井西村庄屋磯野孫六宅へ休息、同村ハ船ニ而水屋村へ罷越、庄屋堀江李太郎宅へ休息、同村之船ニ而御蔵所へ参り、大川筋狩川之水勢見分、夫ハ高田村庄屋青木与三郎宅へ休息、同村之船へ乗替、藤木村分土井へ揚、夫ハ歩行ニ而帰宅

帰宅之上、手代役四人江塩鱒之すしにて御酒差出、御門番・小人江も振廻

昨日降雨強く上ミ郷・下モ郷川筋土居破損所出来候由、宮浦辺ハ去ル戌年山潮之節も水勢強く有之、牛原辺ハ戌年以来之出水と申事也

六月九日 雨天

啓祐院様御忌日ニ付、昌元寺江御寺詣仕

下モ村洪水、夜前戌下刻迄壹尺出増、水量木壹丈四尺迄出相堪、同亥中刻ハ引口相立、今九日辰上刻迄七寸引残、水量木壹丈三尺三寸迄引落候段、高田・水屋庄屋ハ申出

緒方仙八入来、御借金払潰主向之内、正米入札払之儀、最初見込通ニ不相成候故、庄屋中存寄も承り候得共、兔角下モ之肩当りニ相成候筋ハ相整兼、明日ハ千八百兩之利足御見切被成、御本前より御払捨之積ニ相成居候得共、即今之御繰合御費成義ニ付、不凶心付候ハ、御借金払潰之主向ニ付、在町ハ献金七ヶ年賦上納之筈ニ御座候を、式ヶ年縮候ハ、大概千八百兩近く浮出候様相成可申相見、其段同役中江も内評仕候処、同意之趣申聞、小藤太・金十郎・幸之進を算当仕候処、献金式ヶ年繰上ヶ候ハ、凡百兩余ハ不足ニ可至候得共、大体御目度も相立可申如何仕たるものニ可有御座哉之旨内分申出候付、至極可宜旨及返答候処、左様御座候ハ、重而御会席之節主向筋猶又評義仕候様御達被成下度、且又右御主向ニ付献金之儀、御当用不足之補ニ共相成候而ハ終ニ御厄介事ニ付、是等も得と取調置候様仕度との事申聞、是又尤ニ存候間、心付被申聞候趣評議之上、追而差含可申旨及返答

緒方幸之進入来、義倉御備米帳持参差出候付、去丑年分差引当寅三郷村々作食用貸渡之米高致証印

但、去ル亥年已来証印不相濟居、此節拙者ハ取調相達候故、此せつ出

入取調候と相見、等閑之事共也

昨日下モ村洪水ニ付、見分ニ罷越候処、通り筋東土居筋所々洗流し居、或ハ切所も相見候得共、誰有而構候人も無之様見受候、昨日如キ出水ニ相成候而ハ東土居ハ見捨候事ニ候哉、右土居筋ハ誰カ差配いたし候事ニ候哉と幸之進へ相尋候処、一体土居筋之儀ハ、アレよりは迄誰受持有之候へハ、ツイ大様二いたし居候故と相見候旨申聞候付、甚如何敷次第ニ候、一体ニ土居を越候程之洪水ニ候ハ、不及是非候得共、昨日位之出水ニ候ハ、土居筋之低キ所ハ水之不越様ニいたし、切所等不出来様心配可致義、素り場所々々百姓受持候可有之候得共、庄屋・組頭ならハ無由断立廻候様無之して難相濟訳候有之、別而近來御繰合差間^{ごま}之砌ニ候得ハ、御普請所等不相増様役々心配無之して難相濟事之候間、手代中申談候様相達

平川一桂入来^診脈

六月十日 雨天

去ル七日之降雨出水にて左之村へ庄屋も破損所川普請之儀願出候付、見分之儀、作事掛へ申渡

宮浦東村^{破損所十ヶ所}
人夫五百人

小倉村^{破損所五ヶ所}
人夫七百人

長野・金丸両村^{破損所九ヶ所}
人夫四百人

奈良田・野口両村^{破損所五ヶ所}
人夫四百人

田代村ニ而六ヶ所、藤木村にて式ヶ所、瓜生野村にて八ヶ所破損所急場御普請之儀、村之庄屋も願出見分之義、作事掛江申渡

下モ村洪水、今辰之上刻迄壹尺三寸引、同刻残水量木壹丈貳尺迄引落候段、及案内

六月十一日 陰天 昼比少し雨降、夜ニ入強雨

飯田村川筋掘替之儀、兼而評義相濟居候場合致見分呉候様手代中へ申出候付、今辰之刻出宅罷越、手代役青木小藤太・土地方吟味目付兼緒方一郎、作事掛岩谷与三右衛門同伴、御門番茂右衛門・鎗持小人召連

右場所見分相濟、飯田村庄屋宅にて休息、夫も永吉・奈良田・長野・小倉川荒之場所見分、長野庄屋宅にて休息、昼飯給、未之刻過帰宅

左之村々破損所急場普請之儀、庄屋も願出、見分之義申渡

切所十三ヶ所
人夫五百九十八人

永吉両村

切所十三ヶ所
人夫五百三人

園部上村

見分之上三百五十人

切所十五ヶ所
人夫八百廿六人

同 下村

見分之上六百五十人

切所四ヶ所
人夫七百七十人

養父村

下モ村洪水引口相立、水量木壹丈一尺五寸迄引落居候処、又々昨朝之降雨ニ而出戻、今十一日辰上刻貳尺三寸出増し、水量木一丈

三尺八寸出、未出増候段、案内申出

御領分土居筋、已前ハ是ハ何町何某請持と申杭建有之、于今残り居候場所も有之由相聞候処、右様古極相廢候処ハ大様ニ成行、当せつ如キ出水ニも切所多出来如何敷事ニ付、古極之通請持之杭建候様可申旨、手代中へ申渡

祇園会ニ付、今日ハ境内ニをゐて芝居興行

奥・表・賄三役ハ神猷之提灯十五張灯之

但、今晚奥、十二日晚表、十三日賄ハ燈し来、尤三役之役人致差配

六月十二日 陰天 夕方ハ雨降 夜ニ入雷雨強シ

御用日ニ付、会席江罷出

御目付永井岩之丞様、長崎江御下向近々御通行有之候処、留役旅行出違、梯源七郎一人にて御用差支候付、緒方一郎義當時受払留役助勤申渡

目付役前川岸五郎・山方役荒木平内義、所々川普請出来候処、作事掛三人ニ而ハ手届兼候と相聞候付、兩人共當時作事掛助勤申渡、下毛村洪水、昨十一日巳上刻迄式寸出増、水量木一丈四尺出相湛、即刻引口相立、今十二日辰上刻迄式尺引、水量木一丈式尺迄引落候段遂案内

御領中田島江地主何某請持と申義、前々ハ札ニ書付建有之候処、近年相廢居候付、以前之通為建候様可致旨、手代中ハ申出、聞届、先年地方札通用被仰付候節、札千五百枚三役江御任被下候ハ、主

向を付、利潤を以勤続之道取斗度之旨、御年寄中江被相伺御聞届

相成居候処、右地方札主向打崩レ候付而者三役勤続之主向も難相設、就夫右代りニ見替何歟宜主向ハ有之間敷候哉工夫を付見候様、村山東一郎へ平田・内山・某三人ハ内分差含

御目付永井岩之丞様・御徒目付兩人・御小人目付四人、明日当所御止宿之段先触相達候旨、町役ハ届申出

祇園江猷灯十五張、今晚表役ハ灯之、役人致差配

但、式十挺之蠟燭十五丁灯之

六月十三日 曇天 暮比ハ晴

今日祇園会ニ付、地役中休日之先例ニ候得共、長崎江御下向之御目付御泊りニ付、役々致出勤

下毛村洪水、夜前亥上刻迄四尺五寸引、水量木七尺五寸迄引落居候処、昨日之降雨にて又々出戻り、今辰上刻迄式尺出増、水量木九尺五寸迄出、未出増候由遂案内

去ル七日之降雨ニ而川岸破損所、左之通急場御普請之義願出、作事掛取次差出候付、致見分候様申渡

破損所十一ヶ所 人夫八百六十五人

神辺村

破損所六ヶ所 人夫百四十人

田代村

破損所三ヶ所 人夫七十人

曾根崎村

破損所一ヶ所
人夫百四十人

原 村

破損所四ヶ所
人夫九十六人

播崎村

切所三十七間
人夫貳百五十人

飯田村

、長崎江就御用御下向之御目付永井岩之丞様、今酉之中刻比御茶屋江御着有之、御使者拙者相勤

但、昌元寺町口迄御出迎、奥役被相務

長鹿尾藻一箱

御目付

永井岩之丞様

鶏卵

一箱

堅御目録添

右御音物之御品釣台ニ載、宰領御門番直右衛門相附、拙者行列之先ニ為持、御目録ハ拙者駕籠ニ入持越、御茶屋門前ニ而出駕、御目録入文箱若党へ相渡、表門敷居際にて替草り踏替、式台前にて若党へ刀を渡し、御目録若党へ受取致懐中、玄関を^{庄屋中玄関}上、^{いたし候へ}共不及辞義^{相詰居礼}使者之間へ罷通候処、御取次之人出会、御口上 對馬守申入候、御途中無御障御堅固御通行被成珍重存候、為御見廻以使^{御名使者}者目録之通令進覽候旨御口上申達、御目録并名札^{佐藤恒右衛門}相渡候処、奥江入、頓而御用人罷出、岩之丞可懸御目候間御通被下候様との義ニ付、宜御心添被下候へと挨拶、同人誘引にて罷通、御本間へ岩之丞様御着座有之、同所東入頬へ御礼申上候処、当所止宿ニ付而ハ御丁寧御取扱被下置辱次第奉存候、御国元江宜くと御

挨拶有之候付、国元へ可申越旨御直答申上退去

但、先例御音物之御礼被仰聞御使者苦勞之段御挨拶有之事ニ候処、当せつ無其義

金貳百足充

御徒目付

附目録
のし包添

櫻井又五郎殿

旅宿長崎屋

御小人目付

栗原清九郎

松永清四郎

肥前屋合宿

同百足充

たば粉人包
のし包添

伊藤歙之助

山崎政八郎

小松屋合宿

右之通被遣之、宿亭主を以差出拙者義肩衣着宿見廻として罷越取次之人へ名札差出候処、直ニ致誘引候付罷通、いづれも対面之上、双方挨拶被遣物之御礼被申聞

但、宿見廻ハ肩衣着之先格ニ候得共、今日者御使者勤之席ニ付、麻上下之俣罷越

、栗原・松永兩人共ニ櫻井旅宿江入来ニ付、対面致候付、御旅宿江も罷出候筈致挨拶候処、是へ御用有之本陣へ罷出候故、及断候との義故、然らハ是にて懸御目候間罷出候格ニ御心得被下候へと申述

、供廻・行粧等三月四日之通ニ付、爰ニ略之、玄関番永瀬貫一罷出

、岩之丞様衆より御宿亭主を以申来候ハ、先刻御使者へ御音物御礼不申述、甚大様之段宜及挨拶旨、扱又御音物之儀、旅中御用先之事故何方も及御断候間、宜取斗候へと被申聞候旨、御宿亭主の手代中取次申出

、今晚御使者勤夜二入候付、供之者郷夫十五人へ握り飯振廻

、玄関番一人、先供式人、郷々来候若党一人、小人一人、都合五人

江汁漬物にて夜食・中酒振廻

但、玄関番江ハ皿附之木具にて差出

、祇園会ニ付、昨十二日も今日迄芝居興行差免置候処、日和相にて

一日も全不出来候付、明十四日一日丈日延之儀願出候段、手代

中も申出候付、奥役相談之上聞届、其段三左衛門へ相達

六月十四日 雨天

、永井岩之丞様、今朝無御滞御発駕之段、地役中并在町役々罷出取次にて祝詞申出

、就右、奥役外町口迄御見送被相勤

、地役中夜白令苦勞候付、今日休日申渡

、下モ村洪水、昨十三日午上刻迄五寸出増、水量木七丈迄出相湛、

則刻引口相立、今十四日辰上刻迄五寸引、水量木八尺五寸迄

引落候段、案内申出

、宮浦両村・城戸村、田草一番取相濟候段、庄屋も届申出

六月十五日 陰天

、当日為祝詞地役中并生子養育差配役・両町役罷出候付、例之通於机之間受礼

、右相濟而会席江罷出、尤学頭緒方連旅行中ニ付、講談無之

、地役中并三組〔校訂者注〕之者共ニ至、御国渡り其外旅行之節御充行軽く、其上御手当今年賦致上納候付而ハ甚令難渋候様子相聞候処、即今之

御繰合新々成御出方筋御国江申上候時御取揚可被下御時節ニ無之

候間、於爰元いつれと歟主向相設旅行先キ場所柄ニ応多少之間当

所限ニ而御本前御出方ニ不至して御手当被下候道ハ有之間敷哉致

評義、存寄申出候様、奥役同然於会席手代中江差含

、昨朝於御茶屋、永井岩之丞様足輕体之人も食事差廻候様申聞候へ

共、膳碗等不足にて洗替居候由及返答候処、食事不致して出立ニ

相成不都合之次第ニ付、町役之者断挨拶之為メ罷越居、只今迄不

帰候付、多分佐嘉御泊迄罷越たるにて可有之旨手代中も申出、然

処御茶屋入之人数先触致到来居、右様不都束之取扱畢竟留役中并

配膳掛之大様如何敷次第ニ付、此筋評義申出候様ニと手代中江相

達

、下モ村洪水、昨十四日午上刻迄式尺五寸引、水量木六尺迄引落居

候処、昨日之降雨にて又々出戻り、亥上刻迄三尺出増、水量木九

尺迄出、同中刻も引口相立、今十五日辰上刻迄一尺五寸引残、水

量木七尺五寸迄引落候段、水屋・高田両村庄屋も案内申出

、爰元三郷并松浦・怡土両郡夏作出来高、書付を以申出

但、此出来高歩様たかあしさましいたし候ニ而も無之、凡見斗を以申出、全く手数而
已実益無之事也

、爰元三郷・両郡共二三歩之出来高ニ取調申出候へ共、三郷八七歩位之出
来ニ可有之相聞

、江口、町本陣江軛宅有之居候処、御茶屋江被引移候付、当日祝詞
相束、奥・賄同然御茶屋へ罷越、御酒出ル

、江口、夕刻入来有之、御酒出ス

、瓜生野町祇園会ニ付、十四日・十五日両日芝居差免置候処、田代
町祇園会芝居日延ニ付、瓜生野町ハ今日も芝居興行也

六月十六日 陰天

、岩谷三左衛門入来、去ル十五日朝於御茶屋御目付様足輕へ対シ不
都合之訳ニ依、断之為メ町役佐嘉迄罷越、押東五郎と申者へ相頼、
食事不差出して出立之足輕四人江金貳百疋、東五郎且佐嘉にて世
話相頼候向も菓子料差遣、往還雑用共金一兩貳分ニ而無事故相濟、
町役引取候旨申出

町年寄

荒木繁石衛門

荒木 一郎治

平田 喜七

町役格

高尾 正助

右者去ル十三日御目付御泊り之節、為用聞御茶屋江相詰、勤向大
様之次第有之禁足申付

田代町

半助

常平

瓜生野町

伊七

利七

右者去ル十三日御目付御泊り之節、御茶屋江配膳方夫役ニ罷出大
様之儀有之、禁足申付

、請払留役梯源七郎義、去ル十三日御目付御泊り之節、器物用意方
大様之儀有之、恐入差扣伺出、預り置

但、源七郎義、妹之忌中ニ而引入居、親類堀田東五郎も伺書さし出

、下モ村洪水、夜前迄川内江引落候段、案内申出

六月十七日 陰天

、村山東一郎入来、今日者太田観音祭りニ付、家内致参詣候ハ、同
苗怡之吉宅江立寄呉候様噂いたし候得共、家内今日者参詣不致也
、緒方幸之進入来、久留米新川一条懸合方ニ付、佐嘉内談役も申来
候書面并返答草案持参、致一覽差返
、緒方連・大石多兵衛、加布里江米受取ニ召仕置候処、御国送仕出
相濟引取、今夕帰郷之段届申出

、島井儀左衛門江御含之三千俵、佐嘉領早津江井手善兵衛も延売之儀相談相整、引当として爰元藏米三千俵証文差遣置候処、四千俵ニ書改呉候様善兵衛も申来候由にて、四千俵引当証文ニ書改、緒方一郎持参ニ付、則御預印押之相渡

、今夕奥役入来、御弓礮右衛門宰領ニ而御国江差送候御軍用米之内百五拾俵程売払、礮右衛門ハ致欠落、積船ハ志州勝本御茶屋之裏江引付居、表御目付被差越候由沙汰有之段、去ル七日迄之御国状被達候由被申聞

、井手善兵衛御買米代三百兩ハ当月十五日渡之相談ニ候処、大坂も皮代不送来、御国より木綿も不達候付、今暫猶予之儀及頼談候処、三百兩之内半金丈なり共急ニ相渡呉候様申越候由、然処於爰元急調難届候付、島井儀左衛門へ右之趣申遣、於博多調金出来間敷哉示談之為、留役所書手谷口喜十郎出博、明朝出立之筈也

六月十八日 雨天 未之刻比々大雨雷烈し

、今早朝、岩谷三左衛門入来、原村礮平急症相煩、御救人参願出候段申出候付、則人参式分相渡

、下モ村昨日田根付相済、今日も備苗所植付取掛候付、用銀掛出役差配仕候筈候処、留役所病人差扣伺等にていつれも差支、土地方吟味役も罷出来候得共、旅行・病人等にて差支候間、目付役より出役可被仰付哉之段、三左衛門も内意伺出、用銀方之儀ハ手代役より兼勤之義ニ付、備苗所両所へ手代役も出役いたし可然之旨及

返答

、園部両村、田草一番取相済候段、案内申出

、受払留役梯源七郎義差扣伺出相預置候処差返、以書付御叱筋申渡町役四人・配膳方四人、去ル十六日禁足申付置候処、以書付叱筋申付、禁足差免

、料理人嘉平義、御目付御泊り之節氣働宜骨折候付、為褒美鳥目三百文相与

、使番安右衛門右同断ニ付、称美申付

、受払留役助勤緒方一郎義、去ル十三日御目付御泊り之節、足輕之取賄大様之儀有之差扣伺出、預り置

、御軍用米千俵御弓礮右衛門宰領申付御国江送渡候処、於船中御米盗取令欠落候由風聞有之候付、使番下横目崎藏并濱崎目明嘉平義、志州勝本迄差越、同所時宜次第取差図候様申付、崎藏義今夕出立申付

六月十九日 晴天 午之刻過白雨

、御用日ニ付、会席江罷出

、昨日之大雨ニ而下モ村洪水、昨十八日酉之刻迄壹丈出、今辰之刻貳尺出増、水量木壹丈貳尺ニ相成候由、案内申出

、御国仕出取斗、松浦・怡土両郡貫銀帳御支配江差越

、大川筋こぶ列入料之儀、御礼米・公役代米之内貳千五百俵此元へ御任ニ相成居、残貳百俵程有之候を御普請料ニ致手当、年々一ヶ

所充なり共出来候様可致候間、追々手配有之度之旨、奥役・賄役江申談之上、手代中江於会席相達

但、式千五百俵之外、式百俵程爰元へ取遣候而不宜次第候ハ、御勘定奉行所へ何と歎可申来候間、其節大川こぶ勿出来候入料ニ御任被下方御支配へ御願申上候様いたし候而苦ケル間敷旨評義いたし候付、其段手代中江も差含置

東明館引直し入料并文武備銀主向之儀、四月廿三日手代中江差含置候処、今日会席にて申出候ハ、追て心組之品も有之、五ヶ年之末年々百俵位之余米取立候様ニも可相成、左候へハ東明館引直し入料之義、当時之仕繰如何様ニも可出来、段々木性宜相成候付、伐木之義山方申談候様可仕之旨申出、聞届

六月廿日 雨天

夜前安楽寺村辰右衛門居宅出火及焼失候段、庄屋へ案内申出候由、手代役岩谷三左衛門へ申出
就右、手代役門司金十郎・目付役原岡嘉一郎義為吟味差越候処、辰右衛門居宅軒口へ燃上り若ハ天火共ニハ有之間敷哉、出水之砌盜賊之仕業共不相見旨、口書取次差出

但、辰右衛門義、明廿一日禁足申付

受払留役助勤緒方一郎義、去ル十八日差扣伺出預り置候処、伺書差返御叱筋申渡

村山東一郎相招、三郷村々成立盛衰庄屋中勤振精粗取調方之事、

御領中土井築高利害徳失評議之事、宿村成立方取斗之事、近来追々之出水ニ而土居筋防方出精之者共取調之儀、一郎江差含置候間、猶又申談尖ニ取調候様相達

六月廿一日 陰天 時々白雨

下毛村洪水、追々之降雨にて湛居、今廿一日辰上刻迄式寸出増、水量木九尺迄出、尤未出増候段案内申出

赤木金助博多へ来ル、島井儀左衛門来ル廿五六日之頃、隼より帰国之心組ニ候由

谷口喜十郎義、博多へ夜前令帰着候段、届申出

柚比村田草一番取相済候段、届申出

真木村庄屋原茂四郎罷出、賀島先生画像掛物一幅并謂レ書持参ニ付一覽、直ニ差返

近来雨勝ニ有之、郷方もも追て順風之祈禱致執行候付、明日從上も祇園社ニをゐて順風御祈禱被仰付度之旨、手代中へ伺出、則申渡

六月廿二日 陰天

田代町 祇園社ニをゐて天気快晴順氣之御祈禱執行申渡、今日三郷 宗社勧請御祈禱執行ニ付、手代役、其外一役一人宛、三郷大庄屋、一郷へ庄屋兩人充、両町別当・座親布上下着、辰之刻へ祇園社へ相詰、社人・社僧罷出、四座祓相済候上、案内申来

、奥役・表役麻上下着罷出、五座祓有之、畢而奉幣神拜、賄役并手代中已下役々神拜仕、結願相濟而奥役・表役・賄役已下役々神酒戴之 但、奥役ハ服中ニ付、今日不參也

、右相濟而役方用意之御口祝手代役持出、奥役・表役江挟之、奥役ハ賄役已下在町役々・社人・社僧迄口祝被遣之

但、今日奥役不參ニ付、賄役已下ハ拙者ハ口祝遣之

、社人・社僧江為苦勞料鳥目壹貫五百文從 上被成下候付、御目錄手代を以相渡、いづれも御礼申出

、兩役往還共ニ地役中鳥居際へ迎送、社人・社僧者鳥居内、在町役々ハ町並ニ致迎送

、祇園社へ罷出候役々引取掛、御祈禱之挨拶取次を以申出

、社人・社僧ハ御祈禱之御札、手代中取次を以差出、御本家寄附江置之

、右ニ付、供廻左之通

一 先払御門番一人

一 若党 貳人 手人 羽織袴着

一 草り取一人 手人

一 挾箱持一人 町之者自分雇 但、日雇賃六十文与之

一 鍵持 一人 小人 佐次郎

一 立傘持一人 今日ハ相省、不召連

、帰宅之上、小人并挾箱持雇之者へ飯振廻

但、先払御門番ハ奥役兼合ニ罷出候得ハ於此方不取扱候得共、今日ハ奥

役不參、拙者斗リ之先払相務候付、帰宅之上飯振廻也

六月廿三日 陰天

、御用日ニ付、会席江罷出、内山も出勤有之

、御賄方御道具藏開閉之節、留役中立云候先格ニ相聞候処、近来無其儀、御道具出入等使番江相任候と相聞、畢竟右等、等閑ハして御道具取扱方も自然と大様ニ相成、頃日御目付御泊之節腕盤不足ハして不行届も相生如何之事ニ付、御道具之大切を弁、向後御藏錠前賄役封印開閉之度每留役ハ立会、御道具類モト末ニ不相成様可取斗旨、受払留役梯源七郎・大石多兵衛会席江呼出及口達

、大川水刎出来方兼而手代中江相達置候処、御普請一箇ニ取掛候儀者入料御手当も有之事故、いづれ之場所より取掛可宜候哉、出水且平水之節、水当之場所致見分、猶評議申上候様可仕、今程大川出水中ニ付、今日岩谷三左衛門・門司金十郎罷越、見分可仕之由申出

、東明館引移入料且文武備金生財之義、兼而手代中江差合置候処、三十五ヶ村合封之者給米を五ヶ年之間御借上被成候ハ、大略御備も相立可申哉と奉存候、御差支無之候ハ、合封給米借上方三郷大庄屋江致諭達見可申旨申出、文武を御誘被成候段御領中一般子孫之為ニも相成候事故、懇ニ及諭達候様申渡

、宿村庄屋永瀬此右衛門義、是迄ハ鳥栖村ハ欠持ニ相勤居候処、宿村江家内共引越相勤可申旨申出候段、手代役村山東一郎ハ申出、

同村之為体も有之、左様ニこそ心得可申尤之事ニ候間、早々引移、成立方猶又出精相勤候様申付候へと相達

一赤江口 一ヶ所

ノ四ヶ所

酒井村苗代田土井及破損御普請取斗候付、見分として奥役・賄役同然罷越、手代役緒方幸之進同伴、先払御門番直右衛門召連、小人差支候付今日者鎌省之、酒井西村庄屋宅にて休息、暮比帰宅

神辺村井手崩洗鑿之場所・砂堀除人夫御助力之儀、庄屋（とく）願出候付、見分之儀相達

下モ村洪水、壹丈一尺三寸迄引落候段、水屋・高田両村庄屋（とく）案内申出

小倉村・河内村、昨日迄田草一番取相濟候段、届申出
下モ村洪水、今朝迄川内江引落候段、案内申出
御軍用米宰領として御門番善右衛門差越、諸富へ罷下居候処、就病氣代りとして同組勇平召仕候旨申付

長野・金丸・奈良田・野口、田草一番取相濟候段、案内申出
赤木金助今朝出立、博多江罷越候付、留守且鳥井江之書状留守送り、白塩硝・白保半紙一箇託遣

六月廿五日 陰天 未之刻比白雨

六月廿四日 陰天

原栄左衛門・松隈文三郎・御門番勇平・使番伊佐五郎・小人喜三治・諸富（とく）夜前帰郷之段届申出

今朝緒方仙八・岩谷三左衛門入来対面、三左衛門（とく）下モ村土井築立仕法積書一帳・絵図共持参

神辺・萱方・古賀三ヶ村、田草一番取相濟候段、庄屋（とく）届申出

今町治平次男十五歳ニ相成候者、天満宮脇ニ有之池江落入相果、河童之仕業ニ可有之哉之旨及案内候段、三左衛門（とく）届申出候付、先格之通役々見分罷出候様相達

大川筋（とく）こぶ（とく）勿出来之場所致見分候処、左之所々水当り強く相見候間、猶平水ニ相成再見分之上、御普請手始之場所取極候ハ素り入料積等取調可申上旨、手代役岩谷三左衛門・門司金十郎（とく）届申出

大川筋水当之場所

土用入

一中島尻 一ヶ所

六月廿六日 陰天 未之刻比白雨

一牛堀之下 一ヶ所

御用日ニ付、会席罷出、内山も致出勤

一新川之下 一ヶ所

今町治平次男溺死ニ付、為見分昨夕手代役門司金十郎・緒方幸之

進・目付役原岡嘉一郎罷越候処、別而訝敷義河伯之仕業可有之相見候付、死骸勝手次第葬候様申付、引取候段、届申出

、飯田村重田池江五十歳位之男子致溺死居候を酒井村之者見当、何国之者共不相分段庄屋も及案内候旨、手代中も申出候付、先格之通見分之儀相達

、地役中并三組共旅勤之節、両役江名前申出差図を得、当人江相達候格ニ已来相心得候様ニと手代中江申渡

、於会席押印物其外諸書付類、文箱ニ入、取次を以差出候得共、会席出勤中ハ掛り之役々持参差出候様、尤宅々江差出候節者是迄之通、文箱ニ入持廻申付不苦旨手代中江相達、右之趣、書札方江も及通達候様、奥役も被申渡

、留役所諸帳面証印ニ差出候節、文箱ニ入、使番へ為持遣候処、御算用ニ付大切之諸帳面輕卒ニ相見候付、以来証印物ハ留役致持参候格ニ相心候様、手代中を以奥役も被相達地役中已下三組旅行之節、手当銀備方主向評義之趣、手代中取調申出、其内年々米四百五拾俵時相場も五匁高直ニ酒屋江売渡、於在方手酒造込候義御差留被下候様との一ヶ条相見候得共、酒屋江米高直ニ売付候而者不宣候付、外ニ主向筋評義いたし申出候様、奥役同然申渡

、三郷村々成立方盛衰当時之姿取調之義、手代中江相達置候処、今日於会席上郷之分書付差出

、五島兵部様不時御暇被承仰、御在所江御下向、明日爰元御泊り之先触相達候段、町役も申出

、今暁土用ニ入候付、地役中并両町役為見廻罷出、勝手も以取次口上申出

、村山東一郎・緒方仙八入来、盃出、農政筋等之儀、内話申承ル

、重田池江溺死之者見分として目付役永瀬大五郎罷越候処、河伯之仕業ニ可有之相見、尤柳川辺之者ニハ有之間敷哉ニ見請候得共、何方之者共耽と難相分候付、仮埋いたし建札取斗候様、庄屋江申付置候旨申出

但、手代役ニも見分ニ可罷出之処無其儀、追而尋問之事

、曾根崎村 老松宮社人も夏越なごし人形守十式枚来ル

、今晚江口江暑中見廻、且明朝家移ニ付、見廻相束御茶屋へ罷越

六月廿七日 陰天 巳之下刻白雨 夜ニ入殊之外大雨

、御門番善右衛門御米宰領差免候付、諸富も令帰郷候段、名代を以届申出

、永吉両村・原・姬方・田代・幡崎・飯田・曾根崎、八ヶ村、田

草一番取相済候段、届申出

、宮浦西村田草式番取相済候段、届申出

、下モ村田根付昨日迄ニ相済候段、届申出

、三郷村々之田根付相済候段、三郷大庄屋中罷出、取次を以申出

但、田根付済之儀、御国元御支配へ御案内申上候先格也

、三郷大庄屋中罷出、暑中見廻以取次申出

、三郷両町江生子養育料相渡候段、手代中も申出、尤今日之天氣合

二而御屋鋪江米運入雨濡之程も難斗、米之儀養育差配役古賀勘介土蔵ニ入レ有之候付、手数ハ於御屋敷相濟、現米渡方ハ手代役、目付役勘介宅へ罷越、渡方仕度之旨伺出候付聞届、則青木小藤太・永瀬大五郎罷出候段、届申出

〆昨今不順氣ニ付、三郷宗社(荒徳宮、老松宮、四阿屋宮)ニをゐて順氣之祈禱ニ夜三日致宮籠度旨、三郷大庄屋ノ手代中取次を以申出、聞届

〆牛原村四阿屋宮社人ノ夏越人形守六枚来

〆五嶋兵部様当所御泊、今申之刻過御茶屋江御着有之

但、交代御寄合御旗本ニ付、奥役伺御機嫌等之勤向無之

六月廿八日 陰天 巳之下刻白雨

〆五島(五)兵部様、夜前爰元御泊之處、降雨にて川々満水ニ付、今朝出立御見合有之、巳之刻過水引候付、御発駕無滞御通行相濟候段、町役ノ届申出

〆夜前之降雨にて出水強く、園部上村新右衛門居宅倒レ、人命別条無之、同村井手式ヶ所、蔵上村井手一ヶ所及破損候段、両村庄屋ノ及案内候段、青木小藤太申出

〆下モ村洪水出、今卯中刻迄水量木壹丈ニ及候旨、水屋・高田両村庄屋ノ案内申出

〆村々破損所多く出来候由相聞候付、手代中左之通罷越候旨申出

幡崎ノ小倉村迄

神辺村ノ酒井・飯田迄

小倉・園部ノ宮浦迄迄

四阿屋ノ真木村迄

門司金十郎
緒方幸之進

〆今午之刻奥役同然出宅、神辺・曾根崎川筋より酒井村迄、夫ノ重田・姫方通行、暮比帰宅、御門番桂八召連、小人居合無之鍵相省

但、酒井東村・飯田・姫方庄屋宅にて致休息

〆酒井東村弥吉と申者、東土居川筋へ材木流居候を取りニ参り候処、材木ニ取付不申前溺、其俣流失と相見、近辺相搜候得共、死骸不相見候段、庄屋ノ及案内候旨、手代役緒方仙八申出

〆三郷宗社ノ来ル夏越人形守、今晚枕之下タニ敷、相休

但、不案内にて今晚如本文候得共、小ノ月八廿八日、大ノ月八廿九日之

夜敷候事之由

〆罷田美作月並之祓として罷出、備物例ノ通也

六月廿九日 晴天

〆兆徳院様御忌日ニ付、昌元寺江御詣詣仕

〆右帰掛、奥役・江口へも罷越

〆奥役・江口署中見廻入来有之

〆下モ村洪水、夜前酉之中刻迄式尺七寸出増、壹丈式尺七寸まで相湛、無程引口相立、今辰之刻迄七寸引落、水量木壹丈式尺ニ相成

候段、案内申出

〆酒井東村弥吉死骸取揚候段、庄屋ノ及案内候段、手代役ノ申出、例之通手代役兩人・目付役一人見分之儀申渡、青木小藤太・緒方

幸之進・緒方連罷出候段、届申出

御領中井手之儀、其場所ニ依一段堰も有之、或ハ二段・三段・五段ニも出来候作法ニ相聞候処、井手之義、村方限り之普請にて役々見分も無之所より作法を犯し、段取相省候故洪水之節土居打崩し破損も多く相聞候付、以来ハ庄屋江及諭達、作法ぬからざる不扒様普請致し、役々見分有之如何可有之哉之段、村山東一郎江差含

六月晦日 晴天 未之刻比白雨

今卯之刻過出宅、園部上・下モ、宮浦・小倉・長野、川筋荒所見分として罷越、暮比帰宅、手代役緒方幸之進致同伴、先払御門番茂右衛門・鐘持小人貞介召連

江口ニも廻在、園部小松にて行逢、宮浦・木山口迄同道

園部下モ村宝満宮・小松大興善寺・宮浦東村庄屋門司武四郎、木山口櫻井孫平宅にて致休息

但、武四郎方にて茶漬・肴三種にて酒出、孫平宅にて盃出、居残り也

奥役騎馬にて廻在有之、繁左衛門・小藤太同道ニ而孫平宅へ休息有之、同所が被帰

今暮比帰路於途中、瓜生野橋本莊左衛門と申者行逢下座いたし候処、高下駄を付居、先払御門番が制候へ共不相用、不心得之者ニ付、幸之進江明日一統致評議、奥役へ申出候様相含、奥役へハいつれ共相当裁判いたし被呉候様、明朝申談候筈也

下モ村洪水、今辰之刻迄三尺五寸引、水量木八尺五寸迄引落候段、

案内申出

日田御郡代元ノ高橋古大夫・相沢時之進・山崎信太郎・紅林伊九郎が去ル廿四日付書状到来候処、村方拜借御貸附金、当寅年分之内、七月可納分左之通七月十日迄納方取斗候様との義申来

元金千百弍十五兩

一金五拾六兩壹歩

元金四百兩

一同弍拾兩

金七拾六兩壹歩 但利金

外ニ永六十壹文五分

御領分松浦郡田根付後雨天打続、去ル廿七日降雨強く川々出水、田地損所睨と難見極候得共、去ル未・戌、山潮之度より水勢相増候程ニ有之、尤山拔・岸崩等ハ各別無之、御田地之損所ハ去ル未年ニ較候得ハ相減候様相見候段、大庄屋が遂案内候段、手代中が申出

但、破損所三千七ヶ所、潰家壹軒有之由、申出

三郷宗社が来候夏越之人形守、若党使を以相納、尤奥・表・賄三役が惣中にて一社江御最花一封百銅也相添遣之

但、三役若党鬮取にて三社へ罷越、此方ハ 荒穂宮ニ当り候間、三役之

守りを取集、御最花一封相添、麻上下着持越、代参相務ル

西清寺さいせいより来月三日例之通御施餓鬼執行仕候段、取次を以届申出ル

嘉永七甲寅年

每日記

三番

七月朔日
八月晦日迄

佐藤

御用日 朔日 四日 八日 十二日

十五日 十九日 廿三日 廿六日

御国仕出定日 四日 十九日

七月朔日 晴天

〃当日之為祝詞地役中并兩町役罷出候付、机之間ニをみて受礼
〃右相濟而奧江罷出、於御広間孝経且新論之講談緒方連相勤、畢而
会席江罷出

〃怡土郡江差立置候郷飛脚帰郷、同郡八ヶ村水損所之取調、大庄屋
田中右五郎も差越候由ニ而手代中も取次差出

〃緒方一郎留役助勤申渡置候処、本勤入廻ニ付、差免

〃瓜生野町年寄格橋本惣左衛門不礼之訳ニ付、禁足申付

〃松浦・怡土兩郡出水荒所出来候と相聞候付、土地方吟味役目付兼

緒方一郎義、為見分出郡申渡、使番安右衛門相附候段申付

〃下モ村出水無残川内江引落候段、水屋・高田兩村之庄屋も以書付

遂案内

〃奧次男誕生日ニ付、小豆飯出、夕方囲碁、暮過帰ル

〃昌元寺も明後々四日如例御施餓鬼執行之段、相届ル

七月二日 晴天

〃今朝村山東一郎入来、緒方一郎明朝出立之筈ニ付、為届入来

〃園部上下兩村、田草式番取相濟候段、庄屋も届申出

〃神辺・萱方・古賀三ヶ村、右同断

同三日 晴天
今晩も辰ノ刻迄
雨降

〃例年之通於西清寺 萬松院様御施餓鬼執行有之、手代中辰ノ上

刻も罷出、時刻宜キ段案内申来候付、奥役同然長袴着御寺参仕、

休息所江居着、頓而行有之候付、御靈前次之間敷居外江西向ニ
相詰、勤行畢而奥役 御代香被相務、統而自分拜礼、次ニ拙者義
二畳目も拜礼、賄役病氣、手代中同断、相濟而休息所江引取、住
持も水曳玉子天目ニ盛、煮染物等差出、手代中次之間も相伴有之

宝曆・明和比之日帳ニ勤経相濟而兩役参詣之義案内申遣候由相見候得
共、近年連続如本文、委細ハ宝曆十年之日帳有之

但、宝曆年比茶菓子差出、明和之比御酒・吸物五献差出候由日帳ニ相見
ル、其前後如何歟

〃住持玄関下座敷江迎送有之、手代中本堂前迎送有之候也

〃供廻り若党兩人、草り取鍵、小人箱為持候事

但、表役ハ立傘為持候格ニ候得共、致省略

〃挟箱持日雇相雇、賃錢六拾文与之

〃御香奠左之通献上仕

六錢式分 奥役

同壹分五分 表役 佐役ハ壹分也

同壹分 調役 御勘定手代ハ五分也

同式分五厘 手代中

〃御門番桂八、日田江状飛脚として差越置候処、今日帰郷之段相届

〃去月廿七日之洪水ニ而三郷所々破損場御普請願出見分之処、左之

通作事方も申出

覚

三郷合

一人夫貳万三千三拾五人

七掛^{二ノ}

内、人夫壹万四千貳百三拾四人

賃、正銀拾四貫貳百三拾四匁

三郷合

一杭貳千三拾六荷

百四荷 但、壹本持

千三百四拾四荷 但、貳本持

五百八拾八荷 但、三本持

七掛^{二ノ}

伐賃正銀六百八拾壹匁分七厘

三郷合

一柴朶壹万貳千四百七拾把

八掛^{二ノ}

伐賃正銀壹貫六百三拾壹匁四分

一小竹四百拾五束

代正銀七百貳拾五匁

正銀拾七貫貳百七拾壹匁五分七厘

内

正銀四貫貳百貳拾九匁 上郷

同貳貫九拾六匁分七厘 下郷

同拾貫九百四拾五匁九分 養父郡

右者三郷村々急場川御普請所、当秋来春迄見分之分、凡積銀高

如此

覚

三郷合見分高

一人夫壹万九千七百六拾四人

八千四百四拾七人 上郷

内 六千三百六拾八人 下郷

四千九百四拾九人 養父郡

賃正銀拾九貫七百六拾四匁

一杭四千五百九拾九荷

千八百九拾七荷 上郷

内 千九百 五荷 下郷

七百九拾七荷 養父郡

伐賃正銀三貫七百貳拾七匁分

一柴朶貳万八千四百三拾貳把

壹万四千三百七拾貳把 上郷

内 壹万七百四十把 下郷

三千三百貳拾把 養父郡

伐賃正銀三貫八百六拾五匁四分四厘

一小竹七百五拾四束

貳百五十束 上郷

内 三百五十九束 下郷

百四十五束 養父郡

代正銀壹貫八百八拾五匁

合正銀貳拾九貫貳百四拾壹匁六分四厘

右者三鄉村々急場御普請入目、凡積如此

七月四日 晴天

、例年之通於昌元寺御施餓鬼御執行有之、辰之刻ト手代中罷出時刻
案内申越候付、奥役同然長袴着御寺參仕、表玄関ト罷上、同所後
本座江居着休息、直ニ勤行始り候付、御靈前三ノ間束之方江西向ニ
相詰、勤行畢而奥役御代香被相務、続而自拝御焼香有之、引続拙
者二畳目ト拜礼、賄役病氣不參、手代中拜礼、相濟而休息所へ引取、
住持ト冷し素麵差出、手代中次之間ト相伴有之

、兩役往還之節、手代中玄関前へ迎送、住持ハ式台江迎送有之

、御香奠献上、昨日ニ同し

、供廻り昨日ニ同し

、新町佐平と申者禁足申付ル、子細者奥役同然昌元寺ト引取候途中、

佐平女房笠をかむり候俣行列之前を走り通、西清寺隣家江逃込、

裏口江踏立居、不敬之拳働ニ有之、夫佐平兼々家内カネ之示し不行届

ニ付如此

但、町方之風儀不宜、奥役入込之砌、ケ条ヲ以テ嚴達之旨有之、拙者入

込後も如何敷風俗ニ付町役ト急度加嚴論候様手代中を以申付置候

処、兔角風俗不相改、如本文不心得之者も有之、侍分ニ対し不礼仕間

敷旨壁書ニも相達候通ニ候処、我々江さへ如右振合ニ而候得ハ、地役中

且他領之侍中へ対、如何体之不礼相働候も難斗、一統見懲之為ニも相成

候故、佐平女房ハ法度を背之罪科ニも申付可然候哉評議いたし被申出候
様、村山東一郎へ差含置

、下モ村出水ニ而際繩下タ植付之苗、水腐いたし、凡百町ニも及苗
買集難出来、実蒔ニ而も可致哉猶取調伺出候筈之由、養父郡大庄
屋吉松源次郎昨日内分申出、種用之粃凡八九十俵も入り可申候処、
只今ト実蒔いたし候而も穂被出候様相成間敷、馬之食用外不相成
候得共、只々御田地荒レ置不申為之御主意ニ有之趣、村山東一
郎ト申聞、左候へハ実蒔之義実益も無之筋ニ百姓小前之者共令疲
劳候而已ナらす種粃八九十俵郷方貯無之時ハ義倉ト御貸渡不被下
候而難叶、出穂ニ不至時者兼々零落之村方上納も相滞候ハ見張居、
素り上下之為ニ相成候筋ニ候ハ、御損分ニ相拘候訳無之候得共、
実益無之段見張居候実蒔を可為致よりも作得有之品を蒔付させ候
而可然、譬ト而可申候ハ、実益無之粃を貸渡候ト下モ村極貧之者共
江ハ実蒔用ニ当り候丈之粃を相与候ハ、御仁恵ニも相当可申、実
蒔ハ上下之費ニ相見候間、作得之品蒔付方被取調方東一郎江差含
候処、頓而罷出、下郷大庄屋天本素六御寄附江罷出候付及尋問候
処、下郷之儀ハ如何様ニも心配、苗才覚植直し候様可致候、養父
郡之儀ハ郷宿へ大庄屋参り居候付申談見可申由にて引取、又々罷
出、下モ郷之反別を引候得ハ養父郡分凡四十町位之場所ニ候間、
自他ニ掛苗買入、夫共不足之分ハ郷方ニをみて粃用意実蒔為仕可
申由申聞之旨、素六ト東一郎江申出候段、兩役江申出候付、決而
粃貸渡等を拒ミ候訳ニ無之、実蒔いたし候よりも外ニ作得之道ハ

有之間敷哉、猶又加了簡養父郡大庄屋へも直蒔被致度旨及返答

但、緒方仙八八下モ村之義、土用三日かゝり居候へハ実熟いたし候場所
之由申聞、東一郎・幸之進土用入る九日目也只今も実熟いたし候時実
熟無覺束存候旨申聞ル、三左衛門も同様申聞

(上欄) 水腐之苗百町ニ及候とハ申出候へ共、猶取調候所ニ而五六十町も可有之由、三左衛門
申聞ル

初蒔いたし候而実熟之義、七十年前ニ一度有之由申伝、其後初蒔ニ而実熟いたし候事
無之、勿論実益無之候へ共、苗無之節ハ御田地を荒し置候義不相成初蒔為致候作法ニ
而候由、三左衛門申聞ル、且又揚田等ニいたし候其地強之場所共蕎麦其外作物出来不
申場所之由、是又三左衛門申聞ル

水腐之苗、下郷分も養父之方反別広く、此所ニ養父分四十町位と申出候ハ、前ニ頭書
いたし候通、下村植付之苗水腐之分五六十町と相見、夫故下郷分を引、残り四十町ト
申出候間ニ而可在之旨、三左衛門申聞ル

〆両役表立候社参・御寺参之節ハ、以来御門番一人先払相動候様
評議之上、手代中江奥役も被相達

七月五日 晴天

〆今未明博多御門番兩人も役方江書状相達候処、島井儀左衛門御買
米代として木綿貳千三百疋、御国山城卯兵衛手船々頭恒治便も相
達候段申越

〆下郷養父郡村々盛衰、庄屋勤方精墮取調被申出候様、東一郎江差
含置候処、今日書付を以申出

〆村山東一郎・緒方仙八御用向にて入来、対面

〆岩谷三左衛門相招、下モ村初蒔之一条了簡承り、其次第昨日之所
と致頭書置

〆濱崎内山与次右衛門も諸帳面証印之為送来、使番弥太郎宰領とし
て来ル

〆使番平助・小人種八、御軍用米宰領として御国へ召仕置候処、今
夕帰郷之段、届申出、右便御勘定所も之書状相達

〆山城卯兵衛今晩着郷、留守状相達

〆小麦直段間合として明朝久留米江使番召仕候段、留役も申出

七月六日 晴天

〆門司金十郎・緒方幸之進、今未明も下モ村廻在、田坪苗腐之分植
継方令差配、振替可致場所下モ郷分にて凡拾町、養父郡分にて凡
貳十町も可有之哉、未々極り兼候場所所有之旨、申出ル

〆先月廿六日洪水ニ付、破損之ヶ所之御普請入料凡積、御国御支配
江御案内申上、当月四日附之書状仕出取斗

覚

一 貳百貳拾九ヶ所 上郷破損所

一 八拾四ヶ所 下郷同断

一 百貳拾九ヶ所 養父郡同断

一 正銀五拾貫三百拾三匁貳分壹厘

御普請入料

一三拾六ヶ所

松浦郡破損所

一潰家一軒

同郡

一拾町四反余

怡土郡破損所田畑砂入

、村山東一郎相招入来、御領中体勢土地方等之儀申承

、今夕内山より申来参ル、奥役も入来有之居、七夕祭有之

七月七日 晴天

、七夕之為祝詞地役中已下罷出、拙者麻上下着出席、左之通受礼

手代役中

格分之面々

右机之間次江折廻りニ列座、筆口之人より七夕之御祝詞申上候段申聞候付、目出度存候旨挨拶

御扶持人中

養育方ニ付
不罷出

大廻船差引役

右表次ノ間へ列座、筆口より右同断申聞候付、目出度存候旨挨拶

東明館訓導師

青木文造

一座

生子養育方

右同所江罷出、手代役緒方仙八披露之

留役方書手

谷口喜十郎

右者表玄関之間より、披露右同人

右者内玄関之間へ列座、披露右同人

三組中

田代町

別当

座親

町年寄

町役格中

右表次之間江列座、披露右同人

瓜生野町

別当

座親

町年寄

町役格

右同所江列座、披露右同人

、役医・郡目付・大小庄屋中、今日者祝詞不罷出先格也

、右相済而奥役江為祝詞罷出、於寄合之間口祝被差出候付、拙者より

奥役江、奥役より拙者江被挟之、畢而手代役已下如例奥役より口祝被

遣之

但、調役内山繁左衛門病氣不參也

、奥役へ罷出候節、五節句八鍵箱為持候先格ニ候へ共相省、若覚兩人、草

り取ニ而罷出ル

、御茶屋江口、御賄内山江奥役一同祝詞ニ罷越

例年之通、手代中已下江孟蘭盆之御見合、大小麦延売、文武出精之銘々御褒美被下之義及書達

瓜生野町恒八、藏上村助右衛門方へ当五月令捨子候段相頭候付、瓜生野町役の貴返可申哉、藏上村庄屋の瓜生野町へ差返候而不苦哉之段、手代中迄伺出候由申出候付、捨子ハ早速請取渡いたし候様及差図、右二付、恒八先ツ禁足申付

七月八日 晴天

今日御用日ニ候得共、昨日御用取調候付、今日寄合無之先格也

今朝緒方仙八罷出、浅野繁太の之内状披見ニ差出候処、同人義、奥御主向御用掛被仰付、金八百両程御入用之義有之、於爰元調達之見込ハ有之間敷哉、事ニ寄出郷之御沙汰ニも可至旨申越、甚当惑之段申聞候付、奥御入用極而無御余儀筋ニ可有之候処、当所之義御借財段々相嵩、払潰之主向ニ付而ハ問近献金をも被仰付、引続此上御取出之道了簡ニ不及、当夏之洪水ニ而所々破損御普請料凡五百両余ニ相見候処此御入料如何して御手当可相立哉、下モ村之義も出水、植付之苗腐糲蒔等之心配も有之居候中、差当リケ様ニも被仰付候ハ、御調金出来可申と見込候丈之義無之、一応御兩役御内意も相伺申上度候処、前文之口々誠御苦心中之義にて御内意等相憚候様之義ニ御座候、御安心ニ至候道心付候義ハ追而申上候義も可有之、当時之体勢故思召ニ応シ候御返答申上候義、暫御猶予被下候様ニと返答有之居、如何可有之哉、猶又奥役江も及内

談、心付承知有之候様及返答

使番新平、日田御返納金宰領として召仕、今朝出立候段、届申出ル

使番平助、久留米御状飛脚申付、則届ニ罷出

手代役青木小藤太久留米へ内用有之、明日御暇之義、口上申出候付、承り置

使番崎藏義、沓州勝本迄召仕置候処、今日令帰郷候段届出候、同人を勝本へ差越候訳ハ御軍用米三千俵之内納^{不納}千俵、二月廿二日仕出濟、肥前佐嘉郡西船津十六反帆船頭嘉助船ニ積之、宰領御弓磯右衛門申付送渡置候処、多月船中相滞、色々風説有之不安氣之次第二付、為取調崎藏并濱崎目明嘉平と申者沓州勝本迄召仕、吟味之筋も有之候ハ、時宜ニ応し差図有之候様、御茶屋番小田又四郎へ添状差出置候処、頭書ニ而返答申来候ハ、御弓磯右衛門の五月廿五日和多羅浦の致欠落候付、御国元へ申遣候処、六月六日下代万右衛門被差越候付、同七日御米八百八十一俵引渡乗船申付候、右磯右衛門所々にて売払候分百式十九俵、内八十九俵、同三俵樺しまにて売払、同式十九俵多助にて同斷、使番崎藏・目明嘉平御米売払先又ハ磯右衛門行衛をも御吟味方、飛船を以御国元迄伺越置候得共、今日迄飛船帰船不致候間、右兩人ハ帰郷申付候、御国へ御差図ニ依候ハ、又々可申越旨申来

手代役門司金十郎・受払留役大石多兵衛、真木村へ罷越、主向筋等之義取調候段申出ル

、神辺・古賀・萱方・河内四ヶ村、田草式番取相済候旨届申出ル

七月九日 晴天

、召仕候者共江当月前給金且盆季之贈物定式之通与之、別段手拭一筋・扇子式本充、銘々江与之

但、若覚式貫文ツ、仲間老貫六百文ツ、女中老貫五百文ツ、

、大小麦之直段、筑前久留米・当所之相場間糺致平均候処、左之通相成候付、則御定直段相極ル、右書付留役大石多兵衛持参ニ付、致証印

大麦壹俵 代正銀四匁式分八厘

小麦壹俵 代同六匁七分七厘

但、三役并地役中江十二月廿日納にて売渡被下候大小麦、此直段を以差引上納之

事 地役中八正銀と六錢之差ニ銀三歩ノ式ハ寛政六年依願之被相下候也

、御国々相達候木綿売捌方、肥前早津江金善へ為相談使番崎藏召仕度との義、賄役々大石多兵衛を以申出有之候付、達方可取斗旨及返答、尤手代中致退出居候付、両役間届ニ相成候間、御達被下候へと御用番村山東一郎江手紙被差出候様、差含置

、城戸村田草式番取昨日迄相済候段、庄屋々以取次届出ル

、啓祐院様御忌日ニ付、昌元寺江御寺参仕、帰り掛江口江参ル

、今晚奥役江罷越、在町江書達草案持参咄合、内山も入来也

七月十日 晴天

、山方吉田喜間太入来、明日酒井村御普請ニ付杭木入用有之候処、大山々伐出候而八間□ニ逢兼差掛候儀ニ付、鳥栖村万本山々杭木三拾本伐渡方伺出候付承届、御預り之刻印貸渡

、受払留役梯源七郎入来、今日々諸上納取立いたし候段、以取次申出

、肥前々之御買米代ニ当御国々木綿相達居候処、売払方急埒不致、肥前之方差引難届候故、金三百両借用之義、日田博多屋江荒木繁右衛門々相談之書状差出候様可致旨調役々被申聞、多分調達可致由、村山東一郎内話也

、今昼奥役入来、在町へ達筋之草案持参、外ニ心付無之との事也、外ニ口々存寄廉々書付持参有之

七月十一日 晴天 午之刻過 少々白雨

、手代役岩谷三左衛門下毛村廻在、田方之勢宜く相成、此先順氣ニ候ハ、御安心ニ相見候段申聞

、義倉困米之内、糶五百俵千俵也 村々々作食用ニ貸渡、手代役門司金十郎・目付役永瀬大五郎立云相渡候旨申出

但、義倉藏之鑰 拙者封印を以奥役へ預ケ置候を目付役持参ニ付、開封相渡、御蔵へり候上鑰封し持参候付、封目印判押之、御蔵之切封も印判いたし目付役へ相渡候先格也

、牛原・養父式ヶ村、田草式番取相済候旨届出ル

七月十二日 晴天

御用日二付、会席出勤、江口・賄も被罷出

使番安右衛門悴喜平治義、留役所ニ而内分手習為致居候処、御用使をもいたし人柄宜相聞候付、此節使番見習申付

瓜生野町六十人格橋本惣左衛門義、頃日於途中下駄を付、令不礼候付、禁足申付置候処、町役格取揚禁足差免

上町佐平と申者女房、兩役へ令不礼、佐平義、平素之示し方緩セ成故二付、禁足申付置候へ共、無別条差免、女房義、日数三十日外出差留

瓜生野町恒八と申者致捨子候段相頭、不埒之者二付、札之辻ニをゐて二日晒申付、禁足差免

御門番・使番定御雇之者と御門番格・使番格之者と順席之儀、手代中も伺出候付、御門番定御雇を筆口ニ申付、使番格御雇之順席も同様申付

緒方一郎兩郡も帰郷、夜分ニ至御門迄相届、使番安右衛門相附召仕置、一同帰郷

内山繁左衛門へ相頼、金四兩借用

但、去暮御役料米三俵御国も御達越之分於爰元拜借、且又月々御売渡之米を三俵斗りも御役所へ預ケ置、返済之積申談置

三役、中元之祝儀箱肴贈答仕

手代役中已下在町役々・両郡大小庄屋中も中元之祝儀肴代到来

田代村・幡崎村、田草式番取相済候旨届出ル

七月十三日 晴天

下毛村養父部分水腐之田坪植綴不相届分糶蒔仕候処、左之通ニ候由、大庄屋も以書付届出候段、門司金十郎も申出、承届置

田三反五畝 今泉村
但、糶蒔之分

同七反式畝 真木村
但、右同断

同三町七反五畝
但、稗蒔仕候分

同四反五畝 高田村
田畝数五町式反七畝

内 壹町五反式畝 糶蒔仕候分
三町七反五畝 稗蒔仕候分

緒方一郎入来、今度於両郡見分取調之次第委細申出、其内大要之廉々、左二記

一 反別八町三反五畝十五歩 松浦郡
右三月廿七日之夜暴雨洪水ニ而村々田畑損所、土砂入・洗鑿川欠等ニ相成候反別凡如此

一 田畝凡六町八反一畝廿九歩 怡土郡
内九反式畝式十九歩

残五町八反九畝
（戊年大荒年限中、未夕開方ニ不相成分引之

当節損地・砂押・水洗鑿之分

但、怡土郡分猶又取調、大庄屋も申越候害之由申出

一米百拾壹俵壹斗八升貳合壹勺

右松浦郡村々損地拾歩一以上二可相成分凡如此相積候、尤

当秋現收納ニ相成候ハ、此高相減可申由、一郎も申聞

一怡土郡之分も同断之場所にて百十貳三俵ニも可相成哉、是又

当秋收納ニ相成、現高減し可申候由申聞

三郷穢多中も雪駄一足・藁草（履）貳足、中元之祝義として致進上候

付、丁錢三百文（也）半紙にて包、水引結にして与之

当月之御充行、先例之通今日相渡り候付、受取之

両郡庄屋中為惣代、濱窪村鳥巢良助到着之段相届

七月十四日 晴天

孟蘭盆（うらぼん）之為祝詞、左之面々罷出受礼

一手代中・格式之面々机次之間江折廻列座、筆口之人孟蘭盆御祝詞

申上ますと申聞候付、目出度存候旨挨拶

一御扶持人中・大廻船差引役青木厚三郎（養育ニ付者本座次之間江折廻

列座、筆口之人も孟蘭盆之御祝詞申上ますと申聞候付、目出とふ

と挨拶

一東明館訓導師青木文造本座次之間へ罷出、披露手代役緒方幸之進

一養育方、右同断

一役医中、右同断

一同格、右同断

一郡目付中、右同断 但、病氣ニ付、三人共不參也

一留役方書手谷口喜十郎、三之間 玄関之間より同断なり

一三組中、内玄関之間も同断

一馬医、本座次之間も同断 但、病氣不參

一田代町役中、本座次之間も同断

一瓜生野町役中、右同断

一木山口別当、右同断

一同格、右同断 但、病氣不參

一三郷大小庄屋中、右同断

一両郡惣代庄屋鳥巢梁助、右同断

一三郷庄屋子供中、三ノ間も同断

一船才判役 病氣ニ付 不罷出

一川方内談役 病氣ニ付 不罷出

一御用達格松隈廣八 病氣ニ付 不罷出

一平之者 病氣一人も 不罷出

一在町医師中 本座次之間江罷出、披露右同人

一六十人中 旅行病氣ニ而 不罷出

一同格中 病氣ニ付不罷出

一醫師原英伯継目之礼申付、在町医師中之内ニ加り受礼

但、新規之礼ハ御本家御広間ニ而受礼之格ニ候へ共、式日ニハ本文之振ニ

相成来候由、緒方仙八申聞

、英伯ト屬子式本・看代金式未差出

、右相濟而御本家へ罷出、於会席奥役出会互ニ祝詞申述 但、調役内山繁左衛門病氣不參也

但、鍵箱・立傘為持罷出候先格ニ候へ共相省、若党兩人羽折袴着草り取ニ而罷出ル

、例年之通、壁書次がき讀聞「校訂者注」七候付、奥役・表役且賄役病氣不參也 当勤内山繁左衛門大小姓昇進ニ付如此

御広間ニノ間江罷出兩役御本間を後ロニ、南向ニ一列ニ着座、手代中三ノ間へ西向ニ罷出、

格式之面々・御扶持人中ハ溜ノ間、三郷大小庄屋・両町役南東椽

類江罷出、三組及在町役人之内当病差合之者ハ為名代組頭一人

ツ、使者之間へ罷出、佑筆役草野謙佑ニノ間敷居内ニ入、壁書讀ミ

畢而奥役ト誂聞候壁書之条々無遺失弥堅相守、在町末々ニ至迄無

緩様申付候様、演達有之

、御領中風俗心得方且在町役々勤向精ニ入候様手代中を以相達候

二付、壁書濟之上、書面三通奥役ト緒方仙八江被相渡、即席地役

中・大小庄屋・両町役江誂渡

、右相濟而於寄合之間口祝被差出候付、表役ト奥役江奥役ト表役江

互ニ挟合、畢而手代中・格式之面々且用銀掛・受払留役・考鑑

方・佑筆・玄関当番迄奥役ト口祝被挟之、尤御扶持人中ハ次ノ間

之撒劍本間へ罷出候事

但、前々ハ三献之祝有之候へ共、手代中相伴之格ニ候へ共、御時勢ニ付、近年無其儀、

口祝ニ而相濟、小河三四郎在勤中ト口祝ニ相成候よし

、御茶屋江口傳、賄役江為祝詞奥役同然罷越、玄関ト出入いたし候

事、奥役為祝詞此方江入来ニ付、茶・たはこ盆・口祝差出之

、西清寺・昌元寺江孟蘭盆ニ付、奥役同然參詣仕、麻上下着也、西清寺住持下座敷江迎送、昌元寺ハ式台迄迎送也

但、御香奠御施餓鬼ニ献上いたし候付、今日献納ニ不及候事

、奥役行粧、若党兩人・草り取・鍵箱・立傘也、表役も同様之格ニ候得共、

立傘を省、若党兩人・草り取・鍵箱にて罷出、但、若党ハ羽織袴着也

、兩役御寺参リニ付、手代中ハ不罷出候事

、地役中明日者例年之通、暇日申渡

、地役中之内、年若之面々不行作之義無之様、且地役之面々居宅手

広ニ相営、玄関構等身分不相応之向も有之、心得違之儀無之様一

統へ不洩様、手代中ト通達候様ニト口達書相渡

、地役中・両町別当・座親江孟蘭盆之祝詞若党使を以申遣、三役之

若党麻上下着ニ而連立罷越

但、三郷大庄屋江八十七、八日之比、祝詞申遣

、已前ハ六十人中迄若党使祝詞申遣候と相聞候へ共、近年相止候由

近年追々献金ニ付、在町ニ而六十人格之人数相増、難行廻故成へし

、長野・金丸かまろ・奈良田・永吉南北・野口・小倉・宮浦東・鳥栖とす・藤

木・藏上・宿・瓜生野・原・姬方・飯田・曾根崎、田草式番取相

濟候旨届出ル

七月十五日 陰天 昼比雷鳴少し白雨

今日例年之通、地役中休日出勤無之

、兩郡惣代庄屋鳥巢梁助令出立候段、届申出ル

大坂国分三左衛門へ頼遣し置候染物三端、下モ関迄差送、同所御用達ハ小倉御用達藏本甚四郎へ送り越候由ニ而最ハ飛脚ニ而相達

七月十六日 雨天

今朝緒方仙八入来

地役中銘々預之勤向心得之書付差出 別帳有之

同十七日 陰天

昨日之降雨にて今辰上刻迄水量木七尺六寸出水相湛候段、水屋・

高田庄屋ハ遂案内

今夕江口孟蘭盆之為祝詞入来、盃出、岩谷三左衛門申遣入来

おたつ近来不快ニ付、平川一桂申遣入来

同十八日 晴天 夕方少々白雨

下モ村出水、昨十七日辰之中刻ハ引口相立、今朝迄川内江引落候段、両村庄屋ハ遂案内

緒方仙八入来、浅野繁太江之返書内見ニ差出、存寄無之旨及返答

七月十九日 晴天

御用日ニ付、会席出勤、内山も罷出

永瀬大五郎居屋敷統買入候付、御除高被仰付被下候様願出、願書之儀預り置

地役中屋敷坪数御極ハ無之哉之旨手代中江相尋候処已前ハ御極ハ無之旨申聞候付、今程御除高敷数・間尺取調被申聞候様ニ而相達、緒方仙八相招、奥役下女之事ニ付、預頼候次第及内話、且内山与次右衛門ハ頼来候下男心配之儀相頼

同廿日 陰天 暮比白雨強 夜ニ入大雨

平川一桂入来、お辰病体脚氣之症ニ無之、腫氣全く風土替り候所ハ起り虚症も不相見由申聞ル

同廿一日 雨天

東明館参学、盆後今日ハ相始候段、学頭緒方連以取次相届

三郷惣社ニをみて風鎮之祈禱致執行候段、大庄屋中ハ申出候旨、

手代中ハ申聞 但、土用過七日目例年宮籠いたし候由也

夕方内山へ参り多兵衛・喜十郎囲碁

七月廿二日 曇天 度々白雨

御門番専藏・使番新八、長崎江漂民警固召仕置候处、迎使吉村清右衛門着崎ニ相成、右兩人帰郷之段、届申出ル

昨日之降雨にて下モ村出水、今卯之中刻迄七尺五寸出相湛、引口相立候旨遂案内

今夕、内山・江口子息・大石多、入来

同廿三日 晴天

御用日ニ付、会席出勤、内山も罷出

近來雨勝ニ有之候付、三郷村々ニをみて順氣之祈禱執行いたし候旨、大庄屋も届出候段、手代中も申出

下モ村出水昨廿二日申之中刻迄貳尺引五尺五寸迄引落居候処、昨日之降雨にて今廿三日辰上刻迄五尺出増、水量木老丈五寸迄出、未タ出増候段、遂案内

小倉村長入寺看坊速成義、門中も依願同寺住職申付

七月廿四日 晴天

下モ村洪水、昨廿三日午中刻迄五寸出増、水量木老丈五尺二及、即刻引口相立、今辰之上刻迄三尺引、水量木八尺迄引落候段、遂案内

緒方一郎入來対面、頃日地役中并大小庄屋・町役之者共江相達候趣意不取失勤向深切ニ心懸、人心風俗ハ素リ第一耕作方專為致出精、現功相見候程ニ相誘候様、庄屋共へも廻在之節諭達有之候様ニと差含但、一郎義土地方吟味目付役兼勤之

同廿五日 晴天

御領中牛馬所持之馬一帳ニ取調、青木小藤太持參

下モ村出水、今朝迄川内江引落候段及案内

平川一桂入來

手代役岩谷三左衛門下モ村廻在、此節之出水にて水入候場所粟皆腐ニ至候得共、田株ハ各別之痛不相見由申出ル

手代役青木小藤太・緒方幸之進、明日大川見分、若津迄罷下り候段申出、使番平助・実穂藏相附

七月廿六日 晴天

御用日ニ付会席出勤、内山も罷出

神邊村江作事方御用注文之石、取出居候を同村之若者共石工之者と不折合相生候処も国泰寺石垣積用ニ御用之石を取遣候付、作事方も庄屋へ尋問之次第有之候処、其返答ハ程々ニいたし置、手代方へ内意之品為在之と相聞、作事方も応対之品と庄屋も手代方へ申出之趣行違相見、尤石工之者女事ニ付不折合有之、目付役も御領分を追立申付候由、仙八・三左衛門も於内席申聞

橋本次郎左衛門悴免七郎義、病氣ニ付、玄関番見習御免之義、次郎左衛門も依願、差免候旨及書達

同廿七日 晴天

今朝村山東一郎入來、御用之筋申出、此席下モ村江下夕糶米拝借被仰付候御主意無之訳、且免方折合と申訳相尋、向上之免と申事等咄承ル、田代村庄屋若年ながら心懸宜、地方之事尋ニ參り居候付、終ニハ一冊を成し可申由申聞

両郡も御備米拝借之義願出候付、困穀千八百俵之内、先般依願三

歩方五百四十俵拝借申付候残高之半数（前之）半数此せつ拝借申付

但、半高六百三十俵ニ相成候由、東一郎申聞

七月廿八日 晴天

、岩谷三左衛門入来、御領中櫛木仕立方之義ニ付、最前土地方吟味
在勤中心付之次第申出、嘉永二酉年七月朔日兩役ノ御領中江書達
之趣申聞ル

但、此達之趣相守り候得ハ田畑ニ差障候義無之、若も違背之族有之候
ハ、不闕、櫛伐除させ可申事也

、宮浦社人梶田美作例之通、祓ニ罷出

同廿九日 晴天 今夜蒸暑く休兼候程也

、兆徳院様御日柄ニ付、昌元寺江奥役同然御仏參仕

、六月廿九日於江戸表 御名代様御 登城、信使来聘年期御差延之
儀、朝鮮国ノ願出候様相成、御懸合筋被為行届候との御事にて
殿様江御鞍鐙御拝領被為蒙仰、古川采女・廣瀬豊吉右御用骨折候
付、采女へ御銀式十枚・御時服式、豊吉江御銀式十枚拝領被仰付
候旨御沙汰之趣、江戸表ノ日田御代官方へ申来候由、銀会所へ為
知来候由、門司金十郎ノ申出、恐悅之御事也、不日御左右達之上
ハ御祝詞可有之事也

、手代役青木小藤太・緒方幸之進、大川筋久留米方五番荒籠内々為
見分若津迄罷下居、夜前帰郷之段申出ル、尤現場所致見分候処、

久留米御領五番荒籠と肥前御領向合之処、久留米之五番荒籠余程
川上ニ有之、向合兼候得共年来三領立会見分前之所にて肥前方ノ
懸合ニ相成候段不都合ニ相見、猶内談役共評義為致、肥前・久留
米江懸合方御伺可申上との義申聞ル

、大石多兵衛入来、困碁岩谷三左衛門見物也

、今朝御寺詣帰り掛、奥役同前御茶屋江口へ參ル

、神辺村庄屋島清九郎ノ御用取出之石、国泰寺石垣ニ取遣、誤入候
との書付、作事方へ差出候書面、手代役方江内見ニ差出

七月晦日 晴天

、今朝稽古場江見分として奥役同然罷出

、神辺村庄屋島清九郎ノ差出候書面遂披見候処、一旦役筋へ虚事を
申出候始末不埒之心得ニ付、此上者表立吟味被取斗候而被申出候
様、村山東一郎・緒方仙八・岩谷三左衛門相招申達、清九郎ノ作
事方へ差出候書面相渡

、幡崎村利八暴泻（瀉）相煩、御仁恵御救人參願出、人參掛目式分相与

但、此人參差掛之義ニ付、預り人參之内ノ相渡置候旨申聞ル

、瓜生野町役格吉竹与八病氣ニ付、礼席断申出、則差免

御国ノ御鉄砲小兵衛・足輕忠右衛門被差越、今晩着之段届申出、
御支配ノ口々御用向被下留守ノ書状相達

、御軍用米三千俵之内千俵、当二月肥前佐嘉郡西船津十六反帆船頭
直乘嘉助船へ積入、宰領御弓磯右衛門為乗組、御国江送渡置候処、

磯右衛門の船頭江令差図、積入御米之内百式拾九俵船揚為致売払

磯右衛門義宅州渡良浦の致欠落候段、船頭の勝本御茶屋番へ申出

其段御国へ遂御案内候付、下代御船手宰領として被召仕、六月晦

日致入津、御米千俵之内八百七拾壹俵相達候付、行道船頭并乗組

中御尋問之上皆共帰帆被差留、問屋預被仰付置、口書等数通被差

越、此上之御取斗方爰元へ為御任被成候、且又磯右衛門義不埒至

極之者二付、為捕手御鉄砲小兵衛・足輕忠右衛門被差越候間、爰

元三組内功者之者且目明等差添遂穿鑿候様二との義、左織殿・宮

内殿・直人殿・為之允殿の七月十九日付之御状を以被仰下

拙者江御含越千両之内五百両ハ調達之積、御国元へ申上置候処、

是非千金之辻不至して難叶御都合ニ相成、其元ニも追々借財之未

と申容易難相整義とハ相察候得共、跡五百両何分厚配調達追々ニ

而も差送候様周旋可致旨、左織殿・宮内殿・直人殿・為之允殿・

大藏殿御連名六月廿六日付御状相達、金数千両之義何分難相届目次第

閏七月十九日附札を以御断り申上

町人糸瀬屋重吉と申者、御国追放被仰付候間、爰元并兩郡御領中

江入込候共、追払候様との御事、直人殿より六月廿五日御状を以

仰下、翌朔日爰元・兩郡へ触達之義及書達

杉村大藏殿嗣信参判使として朝鮮へ被差渡、六月廿八日上船有之

候段、同廿九日付御状を以、直人殿の被仰下

閏七月朔日 陰天 辰之刻過白雨

当日之為祝詞地役中并兩町役罷出、於机之間受札

右相済而御本家へ罷出、於御広間孝経之講談緒方連勤之、畢而会

席江相詰

当町於 祇園社例年之通兩町の風鎮之祈禱致執行候段、町役の

申出候旨、手代中の遂案内、尤例年淨瑠璃語り為致候旨をも申出

候付、承届置

城戸・宮浦兩村・小倉・長野・奈良田、七ヶ村田草三番取相済

候段届申出ル

神辺村庄屋島清九郎江御用之石取遣之一件尋問申付、口書差出、

古賀・萱方兩村之庄屋江も口書差出

緒方仙八義、島清九郎の申出之趣意且作事方の役談之次第、手

代中を以尋問返答書差出、全体去ル廿六日於内席我々江申出之次

第、双方之行道をも不取糺、申聞之始末不届ニ相見候付、先ッ出

勤方被差留置候様ニと村山東一郎・青木小藤太へ差含

神辺村佐平次、且御用之石取遣候若もの共、吟味口書被申付度旨、

小藤太へ差含置

御国の被差越候組中兩人へ下横目付使番崎藏并濱崎目明嘉平差

添、心当り之場所々々へ吟味候申付候様、手代中江相達

去子年冬 殿様御寄郷之節、大宰府天満宮江御参詣被遊、御門札

且御守差上候様被仰出候付、右御初穂之義、御門札ハ金式百疋、

上御守同百疋、御子様方御惣容分ニ而同三百疋神納いたし候様

及評義候間、御当代様江献納之間者年々右之通可被取斗旨、且又其御勸請之天満宮御神像御初穂千五百疋、此せつ一同致献納候様可心得旨、手代中江口達書相渡、賄役江も被得其意旨相達但、御初穂神納之義、御国を被仰下品に依、如本文取極

閏七月二日 (空百)
白雷雷鳴有之

、神辺村国泰寺組佐平次并組合中江御用之割石勝手ニ取遣候義及尋問、口書差出
、同村庄屋嶋清九郎動向不埒之筋有之、先禁足申付
、同村国泰寺組頭岡本六平次、同組合九平已下十式人之者不埒之筋有之、禁足申付
、萱方村庄屋田中惣左衛門義、清九郎禁足申付候付、神辺村庄屋兼勤申付
、手代役緒方仙八義、神辺村一件ニ付、不行届之次第有之、差扣伺出、則預り置

、安楽寺村之義水腐打続、近年ニ至弥零落困窮ニ及、田畑ニ手離レ候百姓等ハ他領奉公ニも出、其外日用持ニ而日々を過し候もの多ク罷成候と相聞、先ツ御領中一番之零落ニ相見、決而只今之俣難打捨置、同村聞掛之手代役門司金十郎江成立方評義之儀兼而差含置候処、今日入来、彼村之義ニ付而ハ追々申談もいたし居、同村之義手遠之場所柄、折柄八坂雄也真木村江令在住、彼方をハ手近ニも有之候付、同人へ差配役も被仰付置候故、深切ニ踏はまり令

心配居、此程同村ニをみて耕作精ニ入候もの両三人呼出、馬買調遣し、畠も三反斗りハ他村を請作之分請返し可遣候間、耕作出精致候様為相励候処、兩人中ニ馬一疋・畠一反丈を御世話被下候ハ、畠を不荒サ、高田村辺を笑ハれ不申様出精可致旨申聞候由、雄也を承り候段申出候付、百姓之義、牛馬田畑ハ一疋一步も相増候義を好可申を、右様減数之義申聞候段、畢竟疲困無力故之義如此体相成居候段、是非も為体致歎息候、只今之姿ニ候得ハ第一人氣養立、夫を教ニ不取掛候而ハ相成間敷勢ニ相考候、いつれ之道成立方心配無之して難叶、骨折ながら聞掛之義何分精力有之度、如何様ニいたし候ハ、可宜候哉、篤と致思慮被申出候様差含之処、近日雄也申談、彼村へ出役任、大庄屋・農政等召寄評義も為致度存候旨申聞ル

閏七月三日 晴天

、御国を差越候御鉄砲小兵衛・足輕甚右衛門、爰元使番下横目崎藏・目明与市、今日致出立
、内山千次右衛門江大浦半左衛門を送り候紙包巻、小兵衛・忠右衛門へ事託送り遣
、今日長崎仕出し有之、此便芝山庄一郎へ国分三半左衛門を送り候油紙包巻送り遣、飛脚へ託方岩谷勘十郎へ相頼
、御国六十人亀谷喜右衛門方、去夏盜賊之一件、平戸役人大久保三治・日高八十右衛門と申人を盜賊兩人之身柄引渡方ニ付、追々懸